

古見の伝統民俗芸能

森 田 孫 榮

一、はじめに

本稿は1991年より1996年の間、沖縄県立芸術大学附属研究所の実施した西表島古見村落の伝統文化調査に従い、見聞した伝統民俗芸能の状況を記述するものである。

二、芸能の成立した環境

古見は西表島の東部に位置しており、西表島最高峰の古見岳(標高469.7米)を腰当とし、シーラ(後良)川・マイラ(前良)川のはざまの山麓に、居住地のひろがる村落で、尚敬王の冊封儀礼(1719)の際、冊封副使として来琉した徐葆光が著した『中山傳信録』によれば、西表島を姑彌(こみ)と記し、さらに〈八重山の西にある。他島より大きい〉と註が附されており、かつて古見は西表島の中で、他より抜きんできた規模をもつ、村落であったように考えられる。

1500年に中山王尚真が八重山を攻略し、オヤケアカハチを討った後、王府側協力者それぞれへ論功行賞があり、長田大主へは古見大首里大屋子に叙す沙汰があった(『八重山島由来記』・『八重山島年来記』)。石垣島全域の行政を掌握する頭職の称号に、いみじくも古見の名称が冠せられたその事象をなぞるだけでも、往時古見村が八重山にとって、いかに重要な存在であったか窺うことができる。

さらに時代が下って、慶長検地(1610)当時は古見間切として、三離・大枝・平西・与那良・平川・髭川・崎枝の七か村と、鳩間島・小浜島の二島で構成し、1628年の八重山の三間切制移行に伴い、古見首里大屋子の管轄する宮良間切の噺村として爾来、西部の祖納・干立とともに、西表島の中心的役

割りを果たしてきたと考えられる。

とにかく古見は前述のとおり16世紀末期まで、石垣地域とともに政治文化の中心的役割りをにない、スラ所（造船所）の施設なども備えもつほどの村落であった。このように殷賑をきわめた歴史と、山紫水明の豊かな自然を背景として、神霊を崇めつつ習俗の古格を整え、雅びやかに芸能を醸し、伝承してきた消長が、現今の同地域における民俗のなかで、顕著に窺えるのである。

三、芸能の出自

八重山全域に継承されている伝統芸能の出自は神霊信仰で、これにかかわる祭儀のなかにおいて萌芽し、母体がつくられた。

その祖型的在り方を、いみじくもみせているのが古見の神霊信仰であろう。

この世に幸福をもたらす神霊の住む海の彼方の異郷の地から、時に応じて来臨するのが、常世神すなわち「まれびと（まれびと神）」で、これに対する信仰が、わが国の民俗信仰の根幹をなすと説くのは、折口信夫である。

まれびと神の来臨を仰ぐ、最たる事象として、八重山の他界観ニライカナイ信仰がある。まさに、その実態を如実に知りうるのは、アカマター神事で、さらにその初原的さまを、今にとどめているのが、同祭儀発生の起源をもつ古見の世持神信仰だと言われている。

『八重山島諸記帳』（18世紀初期成立）「島中奇妙」の条に

上代古見島の三離嶽に猛貌の御神が身に草木の葉をまとい頭に稲穂をいただき出現する時は豊年で、出現しない時は凶年であるから、所中の人は世持神と名づけてあがめてきた。終にこの神が現れなくなって凶年が続いたので、豊年の願いとして人にかれの形を似せ供物をそなえて、古見三村から小舟1そうずつ出してにぎやかに競争させることを祭の規式にした。そのご利益がみえて豊年なので、ますますその瑞気をしたって、おこたりにく祭ってきた。今村々に世持役という役名もこれになぞらえてとなえているということである。

このように古見では、アカマター神事の発生した土地柄だけに、同祭儀を

軸とした伝統芸能の古格が、豊かに継承されてきた。

四、芸能の分類

古見に継承されている祭祀に伴う伝統芸能は、播種儀礼の芸能(歌謡)、収穫儀礼の芸能(神あそび・歌謡)、結願儀礼の芸能(歌謡・舞踊・狂言・棒技・獅子舞)に大別される。

1. 播種儀礼の芸能

播種儀礼は、稲粟の種子を蒔く種おろしの日の行事で、八重山においてはタニドゥリ(種子取)と称する。

『八重山島由来記』(1705)、「年中祭祀之事」で、

85. 9、10月ニ種子取の事

由来 稲粟種子蒔初メ

三日遊ビ申事

とあり、古くから種子取りと称していたことがわかる。

また『慶来慶田城由来記』では種子取儀礼のことが次のように記されている。

種子取之日、稲種取蒔入、苗代田を帰宅仕、神酒・いはつ頂戴ニ而、村中之老人并役人衆、おはま・うなり相揃、田ふさ・世持役人衆御供ニ而始終銘々祝ひ仕、夜入候ハ、男女之内三四人賦り合、いはつこい取与差分申付、右人数之内壺人、福之主与名を付、家内々江参り案内いたし候得者、丁主を相答候、此殿内之苗ハ惣様犬の毛、まやの毛之事ニ出来、植時分ならハ苗代田取離引直、大まし、長ましあふし持行まきはうれ、いへとて差なてせより者、其夜ニ神の水、主之水あまさほういかいはか葉いて、すたかい白根うり、おるちんのならハ、よしけ竹本入、いはい草ニさかい入、穂出時分ならハ大穂たね、長穂たねまさらせ、実入時分ならハ石の実、かねの実入まさらしの願持参り申候間、祝ひ物之品々、神酒・御五水・いはつ・味噌・まそ・蒜本・魚からもの・たくからもの被下度言葉をかさり懸候得ハ、丁主をハ祝人、右之品々無不足相渡候得者罷帰り、村中家内惣様取集候而、三日ハ男魚取、女すない調、とね本

屋ニ老若男女申請、祝ひ仕候例仕来候処、其時分ハ村中之者共心一地有之候故哉、我増々与物毎勝負之きも持有之、耕作之働仕候得共作り物ハ悉ク出来、上納米并年中飯米緩々与相続、常盤之（前三文字見せ消し。右に「豊之」とある。引用者注）世ニ為有之由候。然処至比日、右例打捨無之、往古之老人も仕出置候事ハ徒事ニ而ハ無之、村中之締方無之候而ハ、老若男女之きも持散々相成、彼是取行能不罷成ニ付而、折目きさり之時、構々之壺所々江相集祝ひ、序ニ吉悪之物語仕候得者、若氣之者、童子男女共迄見なり、聞なり之吉悪次第出来、不出来の方ハ即々科召行仕置候故、自然与散々之きも遣無之、神うやまい并村之兄姉ニ付而、父母兄弟ニ孝有之、うやまい心一地ニ相成候様之古例取持申たる由有之事（現代語訳）

種子取りの日は、稲種子を蒔き入れ、苗代田から帰宅して神酒といはつ（イバツ・飯初）を頂戴し、村中の老人ならびに役人衆、おはま（ブバマ。おば）、うなり（ブナリィ。姉妹）が揃い、田ぶさ・世持が役人衆のお供をして始終めいめいで祝う。夜になると男女のうち、3、4人が、いはつこいとり（イバツコイトーリ）といって各家をまわる。この人数のうち、ひとりを福の主と名付け、家々をまわり取り次ぐと亭主が応対する。

「この家の苗は、すべて犬の毛、猫の毛のように密生し、植える時分になれば苗代田から取り、大きい田んぼ、長い田んぼの畦に持ち行き撒き放り、植えて、差し撫でしておけば、その夜に神の水、主の水を浴びると、上には若葉が出て、下には白根がおり、おるちん（ウリジン。若夏）になれば、よしけ（ユシキ。ユシィキィ。ススキ）のように根が差し、いはい草（オヒシバのこと）のように栄え、穂が出る時分になれば、大きな穂たね、長い穂たねを勝させ、実入り時分になれば、石のような実、金のような実を入り勝させたまえ、との願いを持ってきたので、祝いものの品々、神酒・御酒・いはつ・味噌・塩・蒜本・魚の塩辛・タコの塩辛を下さい」と祝詞を奏上すると、亭主は喜んで、右の品々を不足なく渡すと、持って帰る。村中の家庭からすべて集める。三日目は男は魚を取り、女はすない（スナイ。山海の菜や藻で作った和え物）をこ

しらえ、とね本屋（トゥニムトゥ。宗家）に老若男女が集まり祝う例であった。その時分は村中の者が心をひとつにしていたせいも、我がちに物ごとの勝負をするように心掛けていた。このように耕作してきたので、作物はことごとく出来、上納米ならびに年中の飯米もゆったりと続き、豊かな世であった。（後略）。

八重山各地域における種子取儀礼では、〈稲が種子あよー〉を謡うきまりとなっているが、以上の記述にはその歌謡が欠落しており、その代り、各戸を訪う苗代衆が唱えるのは、〈稲が種子あよー〉に準えた寿詞である。

翻って、古見の種子取儀礼は、豊かな歌謡に貫かれており、前述の内容とは対照的な在り方を示している。

まず、儀礼で謡われる歌謡について述べてみたい。

古見では、種子取の日、あらかじめ3日3晩水に浸しておいた種粃を、男衆がそれぞれの苗代へ一斉に播く。播種を終えた苗代衆は、苗代の〈火の神〉の神前に跼座して、〈稲が種子あよー〉を謡い、苗のすこやかな生育を祈願する。田の帰りには〈道あよー（あんがりちゃ）〉を歌う。

帰宅した男衆は、〈ぎーふんじん（座の神）〉に供えた飯初をいただき静かに精進寝をする。

2日目は年寄り衆が、村の総代宅に集い〈稲が種子あよー〉を謡う。その後、年長者の家から順に各戸を訪い〈稲が種子あよー〉を謡い、苗の生育を祈願する。その後をうけ、若者衆がこぞって、各戸を訪い謡い明かす。

3日目は、神司たちがそれぞれの〈うっかん（御獄）〉の神前で、〈稲が種子あよー〉を謡い祈願をこめる。

道中に謡う歌謡、訪う各戸で謡う歌謡には次のようなきまりがある。

男衆が苗代から帰るときの〈道あよー〉の冒頭では、「種子取りぬうゆわい、むぬつくりぬうゆわい」の歌詞がまず謡われる。各戸を訪うときの〈稲が種子あよー〉の唱い出しには「弥勒世ば待ちわーる。稔り世ば待ちわーる」の歌詞で謡う。また苗代衆が各戸を辞するときは、〈道あよー〉の冒頭に「弥勒世ば待ち来たよ、稔り世ゆ待ち来たよ」の歌詞で謡う。

訪い先の各戸で苗代衆が、〈稲が種子あよー〉を謡うとき、「ゆいぬかざり、いーじしいさりるんゆー」と言上する。〈稲が種子あよー〉を〈ゆいぬかざり〉

とも称していることがわかる。〈道あよー〉にも〈あんがりちゃ〉の別称がある。

稲が種子あよー（ゆいぬかざり）

- | | |
|------------------------------|--------------------|
| 1. いにがだに イネヘー
シタリヨーホーヨー | 稲の種子 |
| いにてしょー
ホーヨー | 稲穂を取り出し |
| けーらまい
イドバフピ
シタリヨー | けーら米
出穂したなら穂首を |
| ダカデショーホーヨ | 抱かせて下さい |
| 2. きゅーぬびい イネヘー
シタリヨー | 今日の日を |
| くがにびいば
シタリヨー | 黄金の日を |
| いらびょー（ほー）り
イドバフピ
シタリヨー | 選びなさり
出穂したなら穂首を |
| ダカデショーホーヨ | 抱かせて下さい |
| 3. なしるだー イネヘー
シタリヨー | 苗代田 |
| ちいむるだーば
シタリヨー | 見積る田を |
| くさよー（ほー）り
イドバフピ
シタリヨー | 拵えなさり
出穂したなら穂首を |
| ダカデショーホーヨ | 抱かせて下さい |
| 4. なしるだー イネヘー
シタリヨー | 苗代田 |

- | | |
|--------------|-----------|
| ちいむるだーば | 見積る田に |
| シタリヨー | |
| うるしょー（ほー）り | 下ろしなさり |
| イドバフピ | 出穂したなら穂首を |
| シタリヨー | |
| ダカデショーホーヨ | 抱かせて下さい |
| 5. なしるだー イネへ | 苗代田 |
| シタリヨー | |
| ちいむるかいしゃ | 見積り美しく |
| シタリヨー | |
| あらしょー（ほー）り | 有らしなさり |
| イドバフピ | 出穂したなら穂首を |
| シタリヨー | |
| ダカデショーホーヨ | 抱かせて下さい |
| 6. いんぬき イネへ | 犬の毛 |
| シタリヨー | |
| まゆぬきいに | 猫の毛のように |
| シタリヨー | |
| まらしょー（ほー）り | 生まらせて下さい |
| イドバフピ | 出穂したなら穂首を |
| シタリヨー | |
| ダカデショーホーヨ | 抱かせて下さい |
| 7. いびぶりや イネへ | 植える時期に |
| シタリヨー | |
| ゆしぶりやに | 移植の時期に |
| シタリヨー | |
| なりょーらば | なったら |
| イドバフピ | 出穂したなら穂首を |
| シタリヨー | |
| ダカデショーホーヨ | 抱かせて下さい |

8. うぶましい イネへ
シタリヨー
ながましいに
シタリヨー
むちいなしい
イドバフピ
シタリヨー
ダカデショーホーヨ
大榊 (田)
9. ばがいび イネへ
シタリヨー
くりゃゆる
シタリヨー
ゆるから しいたかいやヨ
シタリヨー
しるに うり
シタリヨー
ういかいや ばがばい いでいヨ
シタリヨー
イニデショーヨ
我が植えた
10. うるじいん イネへ
シタリヨー
ばがなちいぬ
シタリヨー
なりよーらば
イドバフピ
シタリヨー
ダカデショーホーヨ
これ (私) が移植した
夜からは 下には
白根が下り
上には 若芽が出て
11. やまゆしいきい イネへ
シタリヨー
いばんだぎ
陽春に
若夏に
なると
出穂したなら穂首を
抱かせて下さい
山薄のように
力草のように

- シタリヨー
 さかりょー (ほー) り
 イドバフピ
 シタリヨー
 ダカデショーホーヨ
 12. けーらまい イネへ
 シタリヨー
 なーぱびいく
 シタリヨー
 とうきやんどう
 みやらびぬヨ
 シタリヨー
 うしるから
 シタリヨー
 みるそんな イラヨマーヌ
 シタリヨー
 タキトゥム ディユ
 シィサリ

- 栄えなさり
 出穂したなら穂首を
 抱かせて下さい
 けーら米の
 長葉がなびく
 時節には
 女童を
 後方から
 見るようだ

道あよー (あんがりちゃ)

1. きゅぬびいば
 いらびょーりヨー ヨーイ
 エイサ
 くがにびいば
 サユイサー
 しらびょーりヨー
 ヨヌホンナー
 2. なしるだーば
 くさよーりヨー ヨーイ
 エイサ

- 今日の日を
 選びなさり
 黄金日を
 調べなさり
 苗代田を
 整地しなさり

- | | |
|---------------|----------|
| ちいむるいだーば | 見積もり田を |
| サユイサー | |
| くさよーるい ヨー | 整地しなさり |
| ヨヌホンナー | |
| 3. なしるだーに | 苗代田を |
| うるしょーりヨー ヨーイ | 下ろしなさり |
| エイサ | |
| ちいむるいだーに | 見積もり田に |
| サユイサー | |
| うるしょーり | 下ろしなさり |
| ヨヌホンナー | |
| 4. なしるかいしゃ | 苗代美しく |
| あらしょーりヨー ヨーイ | 有らしたまわり |
| エイサ | |
| ちいむるいかいしゃ | 見積り美しく |
| サユイサー | |
| あらしょーり | 有らしたまわり |
| ヨヌホンナー | |
| 5. いんぬきいに | 犬の毛のように |
| まらしょーりヨー ヨーイ | 生まらせて下さい |
| エイサ | |
| まゆぬきいに | 猫の毛のように |
| サユイサー | |
| たらしょーり | 垂らさせて下さい |
| ヨヌホンナー | |
| 6. いびぶりゃに | 植える時期に |
| なりよーらばヨー ヨーイ | なったなら |
| エイサ | |
| ゆしぶりゃに | 移植の時節に |
| サユイサー | |

- | | |
|---|---|
| ならりよーらば
ヨヌホンヌ | なると |
| 7. うぶましいに
むちいなしヨー ヨーイ
エイサ
ながましいに
サユイサー
むちいなし
ヨヌホンナー | 大柵（田）に
持ち運び

長柵（田）に

持ち運び |
| 8. ばがいびる
ゆるからヨー ヨーイ
エイサ
くりゃゆる
サユイサー
ゆるからヨ
ヨヌホンナ | 私が植えた
夜からは

これ（私）が移植した

夜からは |
| 9. しいたかいや
しるにば うりヨー ヨーイ
エイサ
ういかいや
サユイサー
ばかばい いでいヨ
ヨヌホンナ | 下には
白根が下りて

上には

若芽が出て |
| 10. うるじいんぬ
なりよーらばヨー ヨーイ
エイサ
ばがなちいぬ
サユイサ
なりよーらばヨ
ヨヌホンナー | 陽春に
なると

若夏に

なると |

- | | |
|--------------|--------|
| 11. やまゆしいきい | 山薄のように |
| さかりょーりヨー ヨーイ | 栄えなさり |
| エイサ | |
| いぼんだぎ | 力草のように |
| サユイサー | |
| むとうりょーり | 成長なさり |
| ヨヌホンナー | |
| 12. けーらまいぬ | けーら米の |
| なーぱびいきいヨ ヨーイ | 長葉がなびく |
| エイサ | |
| とうきやんど | 時節には |
| ヨヌホンナー | |
| 13. みやらびぬ | 女童を |
| うしるからヨー ヨーイ | 後から |
| みるそんな | 見るようだ |
| ヨヌホンナー | |

2. 収穫祭祀の芸能

収穫祭祀は初穂儀礼からはじまる。八重山では、シクマ・スクマ・マイシクマ・シクアーなどと称して5月の吉日に初穂を神霊に供える祭儀をした後、6月に収穫がなされ、続いて収穫の祭祀が執り行われる。

一般的に収穫祭祀は、2日ないし3日間行われる。願解き・収穫への感謝、来る年への豊年祈願の構成で、収穫への感謝までを、オンプーリィ、豊年予祝儀礼をムラプーリィと称している。

古見では、初日ウッカンプリーィ、2日と3日・ユーンカイ（世持神迎え）を執り行なわれる。

ウッカンプーリィは与那良御獄（慶田城）、平西御獄、三離・兼真御獄、請原御獄、宇根御獄で、願解き・収穫感謝の祭儀が、神司によって営まれる。

2日目をトゥッピー（当日）と称し、早朝・世迎への舟漕ぎ儀礼が、〈船漕（フナクイ）ゆんた〉を謡いつつ執り行なわれ、午後3時頃、世持神（ユムチィ

ンガン)、黒面 (クルウムティ)・赤面 (アカウムティ)・白 (シィスムティ)
 3 神の来臨を仰ぎ、神歌を謡い、来夏世 (クナツユ) への豊年予祝の儀礼を
 なす。

3 日目は、アサギシキ・ヤームトゥギシキが特定のヤームトゥでなされる。
 ウイタビ (初旅) へ、ミシャグパーシ (御神酒囃子) によって、ミシャグの
 献進をなす朝の儀礼 (アサギシキ) が執り行われ、夕刻から、黒・赤・白 3
 旒の印旗をもつ (マイダツ) を先頭に (ヤマニンジュ) たちは、次呂久・山
 里・富里の「トゥニムトゥ」へ参り、神歌を謡い、来夏世の豊年予祝を寿ぎ、
 夜分にヤームトゥギシキが行われる。

豊年祈願の神歌

(1) 船を漕ぎつゝ謡う歌

- | | | |
|---|--------------------------------|--------------|
| 1 | 古見 ^{くんむら} 邑 ゆすばら ぎらむぬ | 古見村 四十村の若者 |
| 2 | 弥勒 ^{みりくゆ} 世と むちわーる | 豊年の世を持って来られる |
| | なうる世ど むちわーる | 稔る世を持って来られる |
| 3 | 来年 ^{えん} ぬ世ぬ なうらば | 来年の世が稔ったら |
| | 来夏 ^{くなち} 世ぬ みぎらば | 来夏世が稔ったなら |
| 4 | ないしゆゆし | 寄せに寄せ |
| | しいくらなみし | 後の倉庫に並べ |
| 5 | 石 ^{いし} みぎり みぎらば | 石の実入りを稔ったなら |
| | 金 ^か みぎり なうらば | 金の実入りを稔ったなら |

(2) 赤また一白また一の各戸を訪れる時の神歌

- | | | |
|---|--------------|-----------------|
| 1 | なうる世ば 持ちとわーる | 稔る世を持って来られる |
| | みりく世ど 持ちわーつた | 弥勒世〈豊年〉を持って来られた |

(『南島』第1輯・『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

とぅにむとう家のあかまた一歌

- | | | |
|---|---------|------------|
| 1 | 大世持おりよん | 大豊穰の神が来なさり |
| | 広世持おりよん | 広豊穰の神が来なさり |

- | | | |
|---|------------------------|----------------------------------|
| 2 | のうる世持ちようる
みきり世持ちようる | 豊作の世を持って来なさる
稔る世を持って来なさる |
| 3 | 石みきりたぶらる
金みきりたぶらる | 石のような固い豊穡をください
金のような固い豊穡をください |
- (以下は、あかまたゆんたを謡う)

(『八重山古謡』下・『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

あかまたゆんた

- | | | |
|---|--------------------------------|---------------------------|
| 1 | せんぴろ
まんぴろぬ
ふあーどうーぬ | 千尋
万尋の
遠い海の |
| 2 | あんなんから わたりおったる
しろまた あかまたぬまい | 安南から渡って来られた
白また赤またの前 |
| 3 | きゅーぬびば いらび
くがにびば しらび | 今日の日を選び
黄金の日を調べ |
| 4 | やいにゆー
くなつゆーば
にがすすさるば | 来年の世
来夏世を
祈願しますから |
| 5 | やいにゆーば なうらし
くなつゆば みきらしたぼーり | 来年の世は稔らせて
来夏世を稔らせてください |

(『八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について』『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

く^{んむら}古見邑ゆんた

- | | | |
|---|-----------------------------|-------------------------|
| 1 | くんむら
うやぎばら
ぎらむぬ | 古見村
富裕村の
若者 |
| 2 | きゅーぬびいば
くがにぴいば
しらびょーり | 今日の日を
黄金の日を
調べなさり |

- | | | |
|----|---------------------------|-------------------------|
| 3 | かんぬまい
ぬしぬまい
ししゃりてい | 神の前に
主の前に
申し上げて |
| 4 | やいにゆば
くなつゆば
にがよーり | 来年の世を
来夏世を
祈願しなさり |
| 5 | やいにゆぬ
くなつゆぬ
なうらば | 来年の世が
来夏世が
稔るなら |
| 6 | いしみきり
かにみきり
しよーらば | 石の稔り
金の稔りが
しなさるなら |
| 7 | いしみきり
かにみきり
しぬがふゆ | 石の稔り
金の稔りを
しての感謝 |
| 8 | ないしゆし
しくらなに
しよーらば | 真積みし
倉に積みを
しなさるなら |
| 9 | ないしゆし
しくらなに
いしぬかふゆ | 真積みし
倉に積み
石の感謝 |
| 10 | たるかたる
じりがじり
とうゆまーり | 誰が誰が
どれがどれが
鳴響まれる |
| 11 | かんぬまいぬ
ぬしぬまい
とうゆまーり | 神の前が
主の前が
鳴響まれる |
| 12 | たるかたる
じりがじり
とうゆまーり | 誰が誰が
どれがどれが
鳴響まれる |

- | | | |
|----|-----------------------------|---|
| 13 | ちかさまい
ていじりしよーる
とうゆまーり | ^{つかさ}
司前が
祈願なさるのが
鳴響まれる |
| 14 | たるがたる
じりがじり
とうゆまーり | 誰が誰が
どれがどれが
鳴響まれる |
| 15 | よもちまい
しまむちぬ
とうゆまーり | ^{よむち}
世持前〈役職名〉が
^{しまむち}
島持〈役職名〉が
鳴響まれる |
| 16 | たるがたる
じりがじり
とうゆまーり | 誰が誰が
どれがどれが
鳴響まれる |
| 17 | ぎらむぬ
さよかり
とうゆまーり | 若者が
乙女が
鳴響まれる |

〔「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

^{ふなくい}
船漕ゆんた

(1) ^{むとうおん}
本御獄に対する歌

- | | | |
|---|---------------------------|------------------------------------|
| 1 | くんむら
うやきばら
ぎらむぬ | ^{こみ}
古見村
富裕村の
若者 |
| 2 | きゆーぬびば
くがにぴば
しらびよーり | 今日の日を
黄金日を
調べなさり |
| 3 | かんぬまいに
ぬしぬまいに
すさりてい | 神の前に
主の前に
申しあげて |

(2) 子御獄ふおんに対する歌

- | | | |
|---|--------------------------|-------------------------------|
| 1 | やまやまぬ
むりむりぬ
まいなか | 山々の
岡々の
前で |
| 2 | ばがくゆぎてい
くりまぬき
すさるば | 私が漕いで
これ〈私〉が招いて
申し上げるから |

(3) あか(しろ)じゃーまに対する歌

- | | | |
|---|----------------------------|---------------------------|
| 1 | うはらぬる
とうかまつき
ばやざき | 海原に行く
10か月余りの
早先〈船〉 |
| 2 | ゆぬふにぬ
あうなみぬ
うちから | その船の
青波の
うちから |
| 3 | ゆぬていばる
さしていばる
あかじゃーま | ぬいて行く
さして行く
赤またの神 |

(「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

爬竜船競技がおこなわれ、それが終わったあと舟子たちは御獄へ行く。

その時の歌

- | | | |
|---|------------------------------------|--|
| 1 | やいにゆーば
くなつゆば にかい
くなつゆーば ていずり | 来年の世〈豊穰〉を
来夏世〈豊穰〉を祈願して
来夏世〈豊穰〉を手摺り〈祈願〉して |
| 2 | やいにゆーぬ なうらば
くなつゆーぬ みきらば | 来年の世が稔るなら
来夏世が稔るなら |

(「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

とうる
通のゆんた

- | | | |
|----|---|---|
| 1 | くんむら ぎらむぬ
うやきばら さよがねー | こみ
古見村の若者
富裕村の乙女 |
| 2 | きゅーぬぴいば しらびよーり
くがにぴいば いらびよーり | 今日の日を調べなさり
黄金日を選びなさり |
| 3 | かんぬまいに ししゃりてい
ぬしぬまいに うぬきてい | 神ぬ前に申しあげて
ぬし
主ぬ前に申しあげて |
| 4 | やいにゆーば にながよーり
くなつゆーば ていずりおーり | 来年の世〈豊穰〉を祈願なさり
く
来夏世〈豊穰〉を手摺り〈祈願〉な
さり |
| 5 | やいにゆーぬ なうらば
くなつゆーぬ みきらば
(以下神の言葉とされる) | 来年の世が稔るなら
来夏世が稔るなら |
| 6 | いしみきり しょーらば
かにみきり しょーらば | 石の稔りがしなさるなら
金の稔りがしなさるなら |
| 7 | いしみきり しぬがふ
かにみきり しぬがふ | 石の稔りをしての躰で果報〈感謝〉
金の稔りをしての感謝 |
| 8 | ないしゆし しょーらば
しくらなみ しょーらば | 真積みをしなさるなら
倉積みをしなさるなら |
| 9 | ないしゆし しぬがふ
しくらなみ しぬがふ | 真積みしての感謝
倉積みしての感謝 |
| 10 | たるたるどう とうゆまーる
ぢりぢりどう なとうらり | 誰々が鳴響まれる
どれどれが名が取られる |
| 11 | かんぬまいぬ とうゆまーる
ぬしぬまいぬ とうゆまーる
(この2行をもう1度繰り返す) | 神の前が鳴響まれる
主の前が鳴響まれる |
| 12 | たるたるどう とうゆまーる
じりじりどう なとうらり | 誰々が鳴響まれる
どれどれが名が取られる |
| 13 | つかさまいぬ とうゆまーる
ていずりしゆーぬ なとうらり | 司前が鳴響まれる
手摺り主の名が取られる |

(この2行をもう1度繰り返す)

14 たるたるとう とうゆまーる
じりじりどう なとうらり

誰々が鳴響まれる
どれどれが名が取られる

15 ゆむつまいぬ とうゆまーり
しまむつぬ なとうらり

世持前〈役職名〉が鳴響まれる
島持前〈役職名〉の名が取られる

(この2行をもう1度繰り返す)

16 たるたるとう とうゆまーり
じりじりどう なとうらり

誰々が鳴響まれる
どれどれの名が取られる

17 ぎらむぬぬ とうゆまーり
さよがねぬ なとうらり

若者が鳴響まれる
乙女の名が取られる

(この2行をもう1度繰り返す)

(「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

^{でいいり}
出入のゆんた

1 うふゆ むちわーる
ぴるゆ むちわーる
2 なうるゆば むちわーる
みきりゆば むちわーる
3 やいにゆぬ なうらば
くなつゆぬ みきらば
4 かんぬまいに ししゃりてい
ぬしぬまいに うぬぎてい
5 やいにゆーば にがよーり
くなつゆーば ていずりおーり
6 やいにゆーぬ なうらば
くなつゆーぬ みきらば

大世を持って来られる
広世を持って来られる
稔る世を持って来られる
実りの世を持って来られる
来年の世〈豊穰〉が稔るなら
来夏世〈豊穰〉が稔るなら
神の前に申しあげて
主の前に申しあげて
来年の世を祈願しなさり
来夏世を手摺り〈祈願〉なさり
来年の世が稔るなら
来夏世が稔るなら

(この後、トウルヌユンタの下句——神の言葉——を歌う)

(「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

うむとう離りぬゆんた

- | | | |
|----|---------------------------------|--------------------------------|
| 1 | うむとうから ぱるみず
とうるしから ぱるみず | 大本（地名）から流れる水
トゥルシ（地名）から流れる水 |
| 2 | かないぬぬば たらしよーり
とういるぬぬば たらしよーり | 貢布をたらしなさり
十尋布をたらしなさり |
| 3 | ますみますぬ ちびなが
あらしぬぬば ふきだし | 升日田圃の尻に
荒い布をふき出して |
| 4 | あらしぬぬぬ ういなか
くましぬぬぬ ういなか | 荒い布の上に
細い布の上に |
| 5 | かんどうふにば くさよーり
ぬしどうふにば ぎらよーり | 神が船を造りなさり
主が船を造りなさり |
| 6 | くさいある うちなか
ぎらいある あるしいなか | こしらえているうちに
造っているうちに |
| 7 | びふなあふあ いつまらし
みいどうなあふあ なうしだし | 男の子を5人生み
女の子を7人生み |
| 8 | なゆどうすでい いもつたら
いかどうすでい いもつたら | 何をすると思ったら
如何にすると思ったら |
| 9 | びふなふあぬ しなたぬ
みどうなふあぬ たくまぬ | 男の子の姿が
女の子の姿が |
| 10 | さきとうまし うまらし
みしむむく ちくりょうり | 酒を多く造り
神酒を百造り |
| 11 | うぬさきぬ まりばな
うぬみきぬ ふきばな | お酒のでき始めに
お神酒の沸き始めた |
| 12 | たるたるどう ちかしよーる
じりじりぬ うとうむす | 誰々をご招待なさる
どれどれをお伴する |
| 13 | ぶざさけーら ちかしよーる
ふばまけーら うとうむす | 叔父達皆をご招待なさる
叔母達皆をお伴する |
| 14 | さきでいすや ちゃばんむり
みきですや ゆなすむり | 酒というのは茶碗に盛り
神酒というのは皿に盛り |
| 15 | ゆるなんか うふゆわい | 夜の七日のお祝い（をする） |

- あきやか まーゆわい 明けるまでのお祝（をする）
 16 うねかふどう にがよーる その果報を祈願する
 くぬかふどう ていずりよーる この果報を手摺りする
 （「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・
 『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収）

ウブミシャク

- 1 なうるゆぬ 稔り世の
 みきりゆーぬ うんさく 実入る世の御神酒
 2 ちぬざらに 角皿に
 ゆなうしいに んでいちいきい 世直しに満たしいれて
 とう
 3 ぱるみんがし ぱるみんがし ぱるみかせ ぱるみかせ<以上未詳>
 んまんまとう 美味しい美味しいと
 かばかばとう みゆやいしょー 香ばしい香ばしいと お上がりくだ
 り さい
 4 ぴょーし ぴょーし 囃せよ 囃せよ
 ぬるとう ふたつ ぬるとふたつ
 まぬ かつかつよ まぬ かつかつよ
 まぬ かつかつよ しいさり まぬ かつかつよ と申し上げます

この歌謡を、ギリヤムヌ、シジャらが斉唱で謡うと、ウイタビがミシャグザラを両手で捧げ持って、歌に合わせて左右に大きく振る。屋内の座敷では庭のウイタビに相對して2人の先輩が同様にミシャグザラを左右に大きくふる。これはウタイビに所作を教示するためという。

この<ウブミシャグ>がおわると、ギリヤムヌ、シジャらは続けて、<ままりぬゆんた>を謡う。

ままりぬゆんた

- 1 にうすいぬ うんさぐ 根ウスイ〈粟〉のお神酒を
 ばゆしばどう ゆわなうる 囃すと世は稔る

- | | | |
|---|------------------------------|-------------------------------|
| 2 | うやき ながざらに
んでいつきど みはいしよーる | 富裕の中皿に
いっぱい盛っていただきなさる |
| 3 | ままりや
たるがままり
じりがままり | 相手は
誰の相手
どれの相手 |
| 4 | いばばしかし
ゆまばしかし
たーままりねーら | 言って聞かせよ
話して聞かせよ
誰の相手ですか |

〔「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

ウッカンプーリィから、トゥピーの儀礼をめでたく終え、3日目はアサギシキと、ヤームトゥギシキが執り行われる。午前、アサギシキを滞りなく済ませ、夕刻からギリヤムヌ・ウイタビが各ヤームトゥへ再度参り、神歌を謡う儀礼がなされ、夜に入ってヤームトゥギシキの祝宴が開かれる。定められたヤームトゥの庭に筵敷きの場を設け、ヤマニンジュ総勢で集い、寿ぎ歌謡、アカンマブシ・シューラブシ・ウイタビやギリヤムヌによるユングトゥ・ヤーラーヨー・ミブギ・ウイタビユンタ・鳩間節など、夜の更けるまで謡い継ぐ。

アカンマブシ

- | | | |
|---|---|------------------------------------|
| 1 | いらさにしゃ きゆぬひーヨー
ハーリヌ ヒヤルカヒー
どうきさにしゃ
ハイヤースーリ
くがにひーヨ | ああ嬉しい 今日の日はヨ
無上の喜びである
黄金の日はヨ |
| 2 | ばんしいでいる きゆだら
ばにむいるヨー
たきだら | 私の生まれかわる今日である
羽の生える
ほどである |
| 3 | きゆ ゆわいヨー しゅらば
きゆ ふくら
しゅらばヨー | 今日 祝いをしたら
今日 誇り
祝いをしたら |

- | | | |
|---|--|-------------------------------------|
| 4 | あかんまぬヨー いらすぎー
あしゆちゃぬヨ
どうきにやく | 赤馬のうらやましき
足4つなる馬の
大層なる誇り |
| 5 | まりかいヨー
しでいるかいヨー
あしゆちゃヨー | 生まれ甲斐のある赤馬
誕生した甲斐のある
足4つの馬 |
| 6 | うきいなーしゅーにヨー
ぬずまり
しゅーぬまいにヨー
みのーさりよ | 沖縄主〈国王〉に
望まれ
主の前〈国王〉に
所望され |

シューラブシ

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | なゆしゃる ふあーぬ
いかしゃる ふあーぬ
ばーゆみ なりくー
うらゆみ なりくー | 何なる娘が
如何なる娘が
私の嫁になって来るの
私の嫁になって来るの |
| 2 | しいまじいまぬ
むらむらぬ
かいしゃーす
しるさるふあぬどう
ばーゆみ なりくーヨ | 島々の
村々の
美しい子が
色白の子が
私の嫁になって来るよ |
| 3 | かいしゃぬ
ぬまりゆんみ
しるさぬ ぬまりゆんみ
きむどう きむやるヨ | 美しさが
飲まれるか
白さが飲まれるか
肝心こそが心である |

ミブキ

- | | | |
|---|---|--------------------------|
| 1 | きゆぬ ぴば しらびょーり
ウヤキ スヌ ミブギ スリュ
スリュ ミブギ ウヤキ スヌ | 今日の日を調べまして
ミブギ
ミブギ |
|---|---|--------------------------|

(以下節、※印の箇所に入る)

- | | | |
|----|--|--------------------------------|
| 2 | かんぬまいに うぬきてい
ぬしぬまいに にがゆてい ※ | 神様に申し上げて
主の前に願いまして |
| 3 | かんぬまいに しやりてい
ぬしぬまいに うぬきてい ※ | 神様に申し上げて
主の前に申し上げて |
| 4 | やいにゆば にがよーり
くなくちいゆーば ていずりよー
り ※ | 来年の世をお願いしまして
来る夏の世を手摩りしまして |
| 5 | やいにゆぬ なうらば
くなくちいゆぬ みきはらば ※ | 来年の世が稔りましたら
来る夏の世が稔りましたら |
| 6 | かにみきり しゆらば
いしみきり しゆらば ※ | 金実入りがいたしましたら
石実入りがいたしましたら |
| 7 | いしみきり しぬかふ
かにみきり しぬかふ ※ | 石実入りをする果報
金実入りをする果報 |
| 8 | ないしゆし しゆらば
しくらなみ しゆらば ※ | ナイシ寄せをいたしましたら
シクラ並みをいたしましたら |
| 9 | ないしゆし しぬかふ
しくらなみ しぬかふ ※ | ナイシ寄せをする果報
シクラ並みをする果報 |
| 10 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり ※ | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 11 | かんぬまいぬ とうゆまり
ていじいりしゆぬ とうゆまり
※ | 神様が鳴響まれる
手摩主が鳴響まれる |
| 12 | かんぬまいぬ とうみやまん
ていじいりしゆぬ とうみやま
ん ※ | 神様の後には
手摩り主の後には |
| 13 | たるがたる とうゆまり
じりがじり とうゆまり ※ | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、鳴響まれる |
| 14 | ちいかさまい とうゆまり
ていずりしゆぬ とうゆまり ※ | 司様が鳴響まれる
手摩り主が鳴響まれる |

- | | | |
|----|---------------------------------------|--------------------------------|
| 15 | ちいかさまいぬ とうみやまに
ていずりしゆぬ とうみやまに
※ | 司様の後には
手摩り主の後には |
| 16 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり ※ | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 17 | ゆむちいまいどう とうゆまり
しいまむちいぬ なとうらり
※ | 世持ち役様が鳴響まれる
島持ち役様が鳴響まれる |
| 18 | ゆむちいまいぬ とうみやまに
しいまむちいぬ とうみやまに
※ | 世持ち役様の後には
島持ち役様の後には |
| 19 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 20 | ぎらむぬどう とうゆまり
さゆかねどう なとうらり | ギラムヌこそが鳴響まれる
サユカネこそが、名を取られる |
| 21 | ぎらむぬどう とうゆまり
さゆかねどう なとうらり | ギラムヌこそが響まれる
サユカネこそが、名を取られる |

掛け合いのゆんた

- | | | |
|------|---|--|
| (先輩) | ういたびぬぷりむぬ
あらたびぬましむぬ
いざばいぢかいし
みちししんな ういたび
ゆまばゆみかいし
みちししんなあらたび | 初旅者の馬鹿者
新旅者の愚か者
怒ると 怒り返してくる
道を知っているか初旅者
言うと言り返し
道を知っているか新旅者 |
| (後輩) | くとしやりばど
ばなふりたる
やいにから
がるまきとうらすんどー | 今年だから
私は気が狂った
来年からは
ちゃんと準備しますよ
〈頑張ります〉 |

- | | | |
|------|---|--|
| (先輩) | ういたびぬみんたま
みるから
あみふるがらすぬ
みんたまみるそんやー | 初旅者の目玉は
見るからに
雨降る〈雨にぬれた〉鳥の
目玉を見るようだ |
| (後輩) | ぎらむぬぬみんたま
みるから
かぢふきやぎおーぬ
みんたまみるそんやー | 若者の目玉は
見るからに
風邪をひいた やせた豚の
目玉を見るようだ |
| (若者) | くんづみすでいなや
なゆしゃるむぬやりやど
みやらびゆむどば
かいかくしおおる | 紺染めすでいな〈衣裳名〉は
どのようなものであるから
乙女の体を
隠しているの |
| (娘) | びぎりやまや
なゆしゃるむぬやりやど
くんづみすでいなどう
りんちばむっちおおる | 兄〈愛しい人〉は
どのようなものであるから
紺染めすでいなと
愒気をするの |
| (若者) | くすぶるかかんや
なゆしゃるむぬやりやど
みやらびうくすば
かいかくしおおる | くすぶるかかん〈衣裳名〉は
どのようなものであるから
乙女の腰を
隠しているの |
| (娘) | びぎりやまや
なゆしゃるむぬやりやど
くすぶるかかんど
りんちばむっちおおる | 兄は
どのようなものであるから
くすぶるかかんに
愒気をするの |
| (若者) | ばだいりまいちゃ
なゆしゃるむぬやりやど
みやらびびさがま
かいかくしおおる | 綿入りまいちゃ〈女禪〉は
どのようなものだから
乙女の女陰を
隠しているの |
| (娘) | びぎりやまや
なゆしゃるむぬやりやど | 兄は
どのようなものであるから |

ばだいらまいちやど(ママ) 綿入れまいちや(ママ)に
りんちばむっちおおる 悟気をするの

(「八重山諸島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題』・

『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収)

これらの神歌群は、祭儀のなかの各儀礼によって、神招ぎの歌・神崇いの歌・神送りの歌、このように順序だてられるのではないかと考える。

儀礼によって、それぞれ呪禱的・叙事的内容をもち、ことほど潤沢な歌謡を謡う根底には、限りなき神の恩寵としての豊穰を冀い、言霊による感染的呪術を諾う、有機性が横たわっていることがひしひしと感じられる。

古代の人びとはアニミズム信仰のなかで、森羅万象、神秘的な自然現象に精霊が宿ると捉え、従って人間の心意を伝達する最良の手段としての言語もその霊威を重要視し、「ことば」に内在する言語精霊が、この霊妙なる力によって、よい「ことば」を使えば、よい結果が生じ、わるい「ことば」を用いれば、逆な結果を招き、言語が人間の幸、不幸を左右すると考えていたようだ。

歌謡を祭祀の軸にした播種儀礼・収穫儀礼の在り方をみると、古見が、いかに〈言霊の幸ふ〉美(うま)し里であるか、よくわかる。

3. 結願祭祀の芸能

結願祭は、八重山では一般にキチガン・キチゴンなどと称され、今年の豊穰が祈願どおり成就されたことに対する神霊への感謝と、この1年にかけてられた諸願を解くための祭祀で、他祭祀に比べ特異なのは、多岐にわたる芸能の奉納が尽くされることであろう。

古見においても、年中の諸祭祀中、最も華やかに執り行われるのが、結願祭である。よって奉納芸の準備から、当日、請原御獄の神前で演じられる芸能の諸相を辿り列挙してみたい。

結願の日和りがきまると、その10日程前に芸能の諸準備のため、ブドゥリニンジュ(舞踊衆)・キョングンニンジュ(狂言衆)・ボーウチニンジュ(棒技衆)・シィシィカビニンジュ(獅子舞衆)の結成がなされ、それぞれ特定の家を選び、村よりの酒肴を当家の仏前に供え祈り、ブドゥリヤー(舞踊の屋)・キョングンヤー(狂言の屋)を依頼、服飾(衣装・頭飾り)、採り物などの調

達ならびに、芸の稽古を始めるトゥルツキがなされ、祭の前日には公民館に集まり、シクミ（仕込み）が行われ祭の翌日も同場所でトゥズミが行われる。

当儀礼に附随し、演じられる芸能は、棒技・獅子舞・舞踊・狂言に大別される。

棒 技

奉納芸能を始めるに先だって、演者一同がミルク節・ヤーラーヨー節の音曲にのって、御獄のミナカ（斎場）に入場、それに続き、棒技の一団も、イヤー、イヤーの掛声で入り、ミナカを一巡し、棒技が演じられる。棒技の手組みは、一番棒、二番棒、三番棒、五番棒の構成で四番棒は欠落させたまま、次のように演じられる。

棒技の手組み

一番棒 ティンバイ（笠）を左手に採り、右手に太刀を取る武者と、槍を構える武者の闘技。

扮装

ティンバイは、頭部を赤長巾でマンサジ被りになし、白衣・白袴下着付けに、水色襷がけ、赤い脚絆を付けた装い。

槍を執る者は、頭部に唐草模様の巾（サジィ）を被り、額につくりものの金色サシマタ（鋏型）を付け、白鉢巻きを締める。着付けは、白衣の上から、黒いスジカキを羽織り、白袴下ばきで、赤い脚絆の装い。

二番棒 六尺棒を執り構える、武者同志の闘技。

扮装

頭部を水色長巾でマンサジ被りになし、白衣・白袴下着付けに、赤色襷がけ、白黒縦縞脚絆の装い。

三番棒 三尺棒を執る武者と、槍を持ち構える武者の闘技。

扮装

三尺棒を執る武者は、頭部に紫長巾でマンサジ被りをなし、白衣・白袴下着付に黒色襷がけ、赤色脚絆の装い。

槍を構える武者は、頭部に緑地唐草模様巾を被り、額につくりものの金色サシマタ（鋏型）を付け、白鉢巻きを締める。着付けは、白衣の上から黒色袴をかけ、卵色地のスジカキを羽織、白袴下ばきで、赤色脚絆の装い。

五番棒 三尺棒を執る武者と、長刀を持ち構える武者の闘技。

扮装

三尺棒を執る武者は、頭部を水色長巾でマンサジ被りになし、白衣・白袴下着付けに、水色袴がけ、白黒縦縞脚絆の装い。

長刀を持つ武者は、頭部に緑地唐草模様巾を被り、額につくりものの金色サシマタ（鋏型）を付け、白鉢巻きを締める。着付けは、白衣の上から水色袴がけ、卵色地のスジカキを羽織、白袴下ばきで、白黒縦縞脚絆の装い。

ボーウチニンジュ（棒技衆）は、舞踊集団に続いてスナイをなしミナカ（斎場）へ隊伍を整えて入ると、直に一番棒から技が始められる。棒技の終了した組は、左右に分かれて立つ。五番棒が仕舞うと、再び一番棒から技を演じ、それが終わると、一番棒を先頭に伍列をなし楽屋の方へ退く。銅羅太鼓が鳴りひびくと、一番棒を先頭に、駆け足で棒技衆が入場、再び棒技の、すなわちスーマキを奉納する。

舞台芸能

ミナカの芸能棒の技が終了すると、ミナカに設えた舞台において、ウツカ^{むか}ン^{むか}に対し、長者の寿言、舞踊、狂言の奉納芸が演じられる。よって演目の順を追い、その次第を述べてみたい。

番組演目

- 1 座開き かぎやで風
- 2 長者・ンミ
 - 御前風
 - ナチジン
 - ミンヨーミン
 - テンヨー
 - 馬 節

イシャドーネ
 マンガニスツツア
 ションカネーマ
 一番狂言
 二番狂言
 バーチ

- 3 世果報口説
- 4 カザク（鍛冶工）狂言
- 5 恩納節
- 6 鶴亀節
- 7 古見の浦節
- 8 ターカシ（田耕）狂言
- 9 かしかき
- 10 山入らば
- 11 亀組（狂言）

1. 座開き 御前風

^{ぐじひ}
 御慈悲あるゆいどう
^{うまんちゃまぬ}
 御万人ゆ招き
^{かみしむ}
 上下んするてい
^{あううが}
 仰ぎ拝む

八重山では舞台棧敷における芸能の座開き冒頭に、イチバンブドゥリ（一番踊り）、グジンフウ（御前風）と称して、赤馬節やかじゃでい風の若衆踊りが演じられる。

習俗に随い本祭祀では座開きに、かじゃでい風の若衆舞いを演じている。しかし、歌詞は、儀礼に合わせた仰神の寿ぎ歌になっている。

扮装

頭部の髷の頂きに、椿を象った簪、チィヂィバナ（頂花）を挿し、両横にも同簪のスババナ（側花）を挿す。額には、紅白の鉢巻きを締め、髷前方にマイカンガン（前鏡）を、後方の左右からつくり花

の簪を挿す。着付けは、緋のスティフリ（振袖）に角帯を結び、白地紅型染めのスジカキを羽織り、白足袋の装い。

採り物は金扇子1面。

2. 長者・ンミ

長者は沖縄各地で演じられている〈長者の大主〉系統の芸能である。長寿と富貴万福の長者夫婦が、その恩寵を神に感謝して、ひきつれてきた子孫にさまざまな芸能を演じさせ奉納するものである。

長者の扮装は、頭部に黒い帟を被り、眉は白糸のつくり物を付け、頬および鼻下そして顎から長い白髭をつける。着付けは、黒朝衣にミンサーの帯を締め、黒足袋の装い。右手に金色の扇子を広げ持ち、左手に杖をついて、前屈みの状態で所作を行う。

媼の扮装は、頭部にマーニ（くろつぐ）の繊維で作った髷をつけ、着付けは、黒襟の薄紅地の小紋紅型のバッデン（袷表衣）を打掛けに、白足袋ばきの装いで、右手にクバ団扇を採る。

下手から登場した長者とその子孫一同は、舞台を一巡し、長者は神前に向かい寿言を唱えてから、長者と媼は下手手前で、椅子に腰掛ける。子孫は幕の前に横並びに着座する。長者が一同の者に芸能を演じ、奉納いたすよう下知すると、〈かじゃでい風〉を序に、続いて数番の踊りが演じられる。長者は踊りのたびに「ユーシャン クワンマグヌチャー」（でかした、子や孫たちよ）と賞讃の辞をかける。

この〈長者・ンミ〉で演じられる舞踊は、次のとおりである。

御前風・ナチジン（今婦仁）・ミンヨーミン（耳よ耳）・テンヨー・馬節・イシャドーネ・マンガニスツツア・シヨンカネー・一番狂言・二番狂言・バーチ（おばさん）。

これが終了すると、長者夫婦と子孫一同は舞台を一巡して下手から下る。

長者

わみや くぬむら ひやくはたちなるちょうじゃぬ うふ

私はこの村の百二十歳になる長者の大（主）

ありがた わん とうじぶとう どーがふゆ たぼーてい

あり難くも我が夫婦は健康の果報を戴いて

まんまんぬ しでいがふーだやーびる

万々の至福でございます

きゆぬ ゆかる ひに

きゆぬ まさる ひに

くわんまぐわぬちゃー

ひきちりてい うどいはに しみてい にがいかなわたる うふび

あぎやびん

今日の良き日に、今日の勝る日に子や孫達を、引き連れて、踊り

跳ねさせて 願いが叶ったウフピを上げます

またにがゆしや

又願いますことは

つちまさい まさい にんぐ とうし あまてい やしちぬ すご

い しらまちん んしる うにげー だやーびる まんまんぬ し

でいがふーだやびる うーとーとう うーとーとう

土（又は年か）勝りに勝り 年貢も年（？）に余って 屋敷の優

れ（？） 稲叢の真積みも据える

お願いでございます 万々の至福でございます おお尊 おお尊

—腰掛けてから—

くわんまぐわぬちゃー うどういはに しみてい ゆえーしち あ

すび

子や孫達よ、踊り跳ねさせて（して） 祝いして 遊べ

—子供達の踊り終えて—

くわんまぐわぬちゃ やどうに たちむどうてい ゆえーしち あ

しば

子や孫達よ、宿に戻って 祝いして 遊ぼう

<御前風>

きゆぬふくらしゃや

なうにじゃなたている

ちいぶでいうる花ぬ

露ちやたぐとう

この踊りの扮装その他は、座開きの〈かじゃでい風〉と同様になされる。

〈ナチジン〉

なちじんぬくしく ヨンサ

しむないぬくにぶ

みりく世どうまにく ヨンサ

なをる世どうまにく

遊ばばん遊び ヨンサ

踊らばん踊り

稚児の踊りで、数名の幼童が演じる。扮装は、頭部に赤や紫の長巾でヤラビカビ（童被り）になし、白地緋の着付け白足袋ばきの装いである。右手に扇子、左手に手巾を採り持ち踊る。

〈ミンヨーミン〉

石なぐぬ石ぬ 大石なるまでいん

ながらやいたぼり 我親がなし

シーヤブ シーヤブ イジョミー タークミー

ページントー ページントー ミンヨーミン ミンヨーミン

ニンジリキョー ニンジリキョー ピヤーシヨー ビヤーシヨー

テーローテー テーローテー

くぬ殿内うがでい 黄金とうるちきてい

ありがあかがりば みりく世果報

シーヤブ シーヤブ イジョミー タークミー

ページントー ページントー ミンヨーミン ミンヨーミン

ニンジリキョー ニンジリキョー ピヤーシヨー ビヤーシヨー

テーローテー テーローテー

これも稚児の踊りで、ふたりの幼童が演じる。扮装は、頭部に赤い長巾でヤラビカビ（童被り）をなし、赤地に白い花模様の着付け、白足袋ばきの装いである。採りものはなく、素手にて手振り、囃子にのって、曲げた左ひじの下方へ右手の掌を当てる、独特な所作で演じる。

〈テンヨー〉

- 1 年々ぬ今日やよ あすびばなでむぬ
テンヨーテンヨー シトゥルトウテン
ササ シタリヨーヌ ヨイヨナ
- 2 我やいまわらび 菊ぬ花でむぬ
テンヨーテンヨー シトゥルトウテン
ササ シタリヨーヌ ヨイヨナ
- 3 遊ばばん遊び 踊らばん踊り
テンヨーテンヨー シトゥルトウテン
ササ シタリヨーヌ ヨイヨナ

これも稚児の踊りで、ふたり立ちの幼童が演じる。扮装は、頭部に白鉢巻きを締め、赤地に白い花模様の着付け、白足袋ばきの装いである。右手に白魔を採り、それを打振る所作をなす。

〈馬節〉

- 1 とうまた松ぬ下から
馬ばぬりおおるすや
シターリヨーヌユバナヲレ ミリクユーバタボラレ
- 2 たるたるぬどうぬりおおる
じりじりぬどうぬりおおる
シターリヨーヌユバナヲレ ミリクユーバタボラレ
- 3 古見ぬ主ぬどうぬりおおる
主ぬ前ぬどうぬりおおる
シターリヨーヌユバナヲレ ミリクユーバタボラレ

これも稚児の踊りで、ふたり立ちの幼童が演じる。扮装は、頭部に白鉢巻きを締め、白衣と白袴下着付の胸部に、黒地菊花模様のスジカキを羽織り、白黒縦縞の脚絆を付け、白足袋装いをなし、胴部に馬頭のつくりものを結いつけ、それに取り付けられた手綱に準らえた緋色の長巾を、左右の手でとり、馬を御すさまを所作して踊る。

〈イシャドーネ〉

- 1 いしゃどーねぬ浜ぬ

三本がじまるや

そのまんざい どうつとう
みじらさや そのまんざい

2 ありがしちゃうてい

ぶどうり遊しばなや
そのまんざい ぶどうり遊しばなや
そのまんざい

3 夜ぬ山道や

ぬーうとうらーさが うりしたりよ
したりよーぬ 赤馬うとうらさや
ユイサ ユイサユイサ
ユイサ ユイサユイサ

二人踊りで、ふたり立ちの二才が演ずる。扮装は、頭部に白鉢巻を締め、黒紋付きタナシを着し、角帯を結び、腰に水色の長巾で扱結びになし、白足袋をはき、白黒縦縞の脚絆を着け、手笠を右手に採り持ち踊る。

〈マンガニスツツア〉

- 1 いらさにしゃ今日ぬ日 (訳は省略)
どうきさにしゃ黄金日
- 2 ばんすいでいる今日だら
ばにむいるたきだら
- 3 今日ゆわいしゆらば
あちゃふくいしゆらば

女踊りで、乙女のひとり立ちで演じられる。扮装は、頭部に白鉢巻を前結びになし、着付は、紺地白緋のスティブター（広袖衣）を纏い、ミンサー帯を締め、白足袋ばきの装いで、両手に四ツ竹を執り、打鳴らしながら踊る。

〈ションカネーマ〉

- 1 ばぎなかーぬ みついから
あすびばま みついから
サユイサ ユイサ ユイサ
ションカネマヨ

- ユイヤサー ショインカネーマヨ
- 2 あらかかーぬ みついから
 まいぬばま みついから
 サユイサ ユイサ ユイサ
 ションカネマヨ
 ユイヤサー ショインカネーマヨ
- 3 たるたるどう ついかいす
 じりじりどう うとうむす
 サユイサ ユイサ ユイサ
 ションカネマヨ
 ユイヤサ ショインカネーマヨ
- 4 古見ぬ主どう ついかいす
 主ぬ前どう うとうむす
 サユイサ ユイサ ユイサ
 ションカネマヨ
 ユイヤサー ショインカネーマヨ

二才踊で、二才がひとり立ちで演じる。扮装は、頭部に紅色の鉢巻を前結びになし、水色のタナシを着し、角帯を締め、白足袋ばきの装い。左右の手に金色の扇子を採り構える。

〈一番狂言〉

八重に花咲く古見の島
 色香まさらし梅桜
 わらび踊いゆながむりば
 サティムサティサティ
 フタガザミユサミ
 トウカグシユーアミ
 グニツィマフェカジ
 ヤファヤファタボーティ
 グックムヂクイマンマンマンサク
 トウシニトウシグトウ

アヌヤンカヌヤン
 ウデューサカムチ
 サミトゥサカジキ
 ナナーチ ナナーチ ヤーチ ヤーチ
 スシドゥ マタンチャ
 ウムシリムヌサミ サアッサ

二才踊りの形態をとり〈ツクドゥン〉のひとり立ちで演じる狂言である。
 〈古見口説〉中の冒頭の歌曲が地謡に当てられ、長い囃子を唱えつつ所作が
 なされる。扮装は、頭部に白鉢巻きを前結びにし、紺地のスディブターを着
 流しになし、角帯を締め、黒足袋ばきの装いでなされる。

〈二番狂言〉

千代んかわらんいらぶかた
 みるに昔ぬしぬばるる
 からりくるりとうひちぐるま
 サティムサティサティ
 マシヌマシカジ イニヌユカドゥヤ
 ミミシリトゥヌジャ
 イイッティミツチャヤ
 シルヒジャサシクミ
 フワーヌンディシヤ
 ショウブヌフワーサミ
 チジニユタリバ
 サンビャクサンジュー
 ナナチジアヤビン
 アリガウハチヤ
 カミニウサギティ
 ニングジョウノー
 キックニウサミティ
 ヌクイアマイヤ
 ヤシチヌマンマル

マジンクナビティ
 アマザキカラザキ
 ダディクンソーティドゥ
 ウイムワカジム
 ミナジムスルユティ
 ヌダイアシダイ
 ウドゥイハニスセ
 ウムシリムヌサミ サアアッサ

二才踊りの形態をとり、〈パーチン〉のひとり立ちで演じる狂言である。〈古見口説〉中の第2節目の歌曲が地謡に当てられ、長い囃子を唱えつつ所作がなされる。扮装は、頭部に白鉢巻きを前結びにし、紺地のスディブターを着流しになし、角帯を締め、黒足袋ばきの装いでなされる。

〈バーチ〉

- 1 遊ばばん遊び 踊らばん踊りよや
 今日やばが島ぬ、ゆねげやくとう
 スーリヌダンクヨーダンク
 ワアッタスーヤ イキガイ
 ワアッタアンマ イナグイ
 スーリダンクダンク
- 2 遊びでんあらぬ 踊りでんあらぬよや
 わんなせる親や、神がやゆら
 スーリヌダンクヨーダンク
 ワアッタスーヤ イキガイ
 ワアッタアンマ イナグイ
 スーリダンクダンク

この踊りは、バーラシキョンギン（笑わせ狂言）の形態で、女のふたり立ちで演じる。扮装は、頭部に赤い長巾を被り、後結びになし、藍色のスディブターを着流しになした者と、片や長い長巾を頭に被り、後結びとし、黄色のスディブターを着流しに装った両名によって、足袋ははかず素足でなされる。

以上が〈長者・ンミ〉にかかわる芸能である。

3. 世果報口説

- 1 今年くとうじゅしちちぐとうや
弾くや三線ちりおおてい
くとうしはやしぬ世果報年
- 2 今年みりくぬ世果報年
みぐりみぐりてい又ちゃりば
ぐくく物作万作い
- 3 高きぐていんにさしぬぶてい
見りは煙や立ちしげく
民のかまどは賑いて
- 4 時ん違わん十日越しぬ
雨に千草もうるおいて
波も静かに吹く風は
- 5 枝をならさんこの御代に
生れおおみよたのもしや
きみの恵みのありがたや

二才踊りで、ひとり立ちで演じられる。扮装は、頭部に白鉢巻を結び、黒紋付のタナシを着し、角帯を締め、白黒縦縞の脚絆をつけ、白足袋ばきの装いで、両手に扇子を採って踊られる。

4. カザク（鍛冶工）狂言

農作物の豊穰を予祝する狂言である。しかし、直接そのことをいうのではなく、農作業のため道具を立派に拵えることで、間接的にその意を表すのである。

この狂言のなかでは、石垣島にヤマトから直接鉄の移入されたことが謡いほのめかされている。前打2人が鍛冶工の持つ、農機具作成用の焼けた鉄を打ちながら謡う歌謡がそれで、石垣島大浜村のヒルマクイ、幸地玉ガネの2兄弟が薩州坊の津から、農機具を買い入れたという、『八重山島由来記』に所

取された崎原御獄の由来のことを、暗にほのめかしているともとれる謡で、側面的に八重山地方への鉄器移入を検証していく上でも重要な示唆となりうる狂言だと思料する。

この狂言は古見の結願祭で演じられている外、竹富島の種子取り祭や、小浜島の結願祭でも〈例の狂言〉として、それぞれの方言で演じられているものである。

登場人物は、鍛冶工、伊武戸（鞆押し）、加那・祖良（向う鎚）の4人。

筋立ては、仕事（農作業）を割り当てられた伊武戸が、農具が少ないので、鍛冶工に新たに作ってもらうようお願いするところから始まる。鍛冶工はその頼みに応じ、伊武戸とその下役の加那と祖良を引き連れ、鍛冶にとりかかる。先ず始めに鍛冶場を清掃し、鍛冶の神にカザリフチィを唱え上げる。一同で神に供えた神酒のおながれを戴いて、作業が始められる。途中、鍛冶工と伊武戸、加那、祖良とのやりとりがある。そして、無事に鍛冶を終えて帰途につくというものである。

この狂言は〈例の狂言〉であるが、滑稽味を前面に出したものとなっている。そのなかでも、鍛冶工が打ち上げたばかりの鍬を伊武戸の手に渡し、伊武戸が火傷をして鍛冶工の両耳をつかまえる部分と、見事に打ち上がった道具を讃えて、加那が「この道具であれば、2、3日もかかる仕事でも1日で終わる」といったのを受けて、同様に道具を讃えようとした祖良が「この道具であれば、1日で終わる仕事も2、3日掛かる」と逆に言い間違えて、鍛冶工に叱られるところが、この狂言の笑いのポイントとなっている。

狂言の中で、相鎚の所作及び演じ終えて演者が幕へ入る際に次の歌謡が謡われる。

〈相鎚のとき謡う歌謡〉

- 1 浜ぬ真砂や 金てんどー
河原ぬ水ぬ 酒なるか
いく年までいん ていりまさる
- 2 大和ぬ島から 渡さばえ
やしるのふんから 移らばえ
八重山石垣ん かいくみてい

〈終幕のとき謡う歌謡・うやき節〉

- 1 古見ぬ浦ぬ ぶなれまよ
みゆしくぬ みやらび
ウヤキヨーヌ ウーラスミーカヨ
- 2 たるたるんどう ぬましょうるよ
じりじりんどう ぬましょうるよ
ウヤキヨーヌ ウーラスミーカヨ
- 3 かなさすんどう ぬましょうるよ
んぞさすんどう ぬましょうるよ
ウヤキヨーヌ ウーラスミーカヨ

この狂言の扮装は、鍛冶工と伊武田が紺のタナシに角帯しめの着流しに、黒足袋履きの装いで、後段、着衣を脱ぎ、白衣に黒帯、白袴下、赤襷の装い
に変わる。加那と祖良は、白衣にミンサ帯結び、白袴下穿き、水色の襷がけ
で、黒足袋履きの装いである。

5. 恩納節（記述を割愛する）

6. 鶴亀節

- 1 千歳経る松ぬ
みどうり葉ぬ下に
亀が唄すりば
鶴は舞え方
(ハンガントーレー節)
- 2 今年から始まる下原ぬ踊い
二才ばかいすだしてい
踊らし舞うらし
前結んかたきさまん
美う美うら
シュウザシテー シュウザシテー

3 鶴と亀とうぬ齡や

千年 万年

我ぬん年くなびてい

幾世までいん

子孫さんむていさかてい

シュウザシテー シュウザシテー

(下原節)

この二才踊りは、明治以降創作された雑踊の系譜を延く琉舞で、〈松竹梅〉のなかで、退羽の踊りとして挿入されているものである。

長寿の象徴としての鶴亀のめでたさを寿ぐ歌詞に、黒島の〈ヒャンガントーレー節〉、西表の〈下原節〉が、曲節として使われている。

この踊りの立方は、二才着付け拵えの2人立であるが、鶴のつくりもの冠と、亀のつくりもの冠を、それぞれ頭頂に被るいで立ちである。

扮装は、頭部を紫の長巾で、マンサジ被りになし、その上から鶴・亀のつくりもの冠を被る。衣裳は紺地タナシを、裾短かに着し、右袖を片脱ぎになし、角帯を締め、腰に水色の扱き帯を結び、白黒縦縞の脚絆を着け、白足袋の装いで、金色の扇子両手採りの構えである。

7. 古見の浦節

1 古見ぬ浦ぬ八重岳ヨー シタリヌ

八重かさび みゆすくヨー

いちいん みぶしゃばかりヨー

2 桜花 ぶなれーまヨー シタリヌ

梅香しゃ 女童ヨー

いちいん 花やさかいヨー

3 袖振らば 里之子ヨー シタリヌ

沈伽羅ぬ 匂いしょうるヨー

いちいん染まる匂いヨー

アッタラシャヌ クンノーラ、シティリティナ、ナギリティナ

シティラルヌ、ナギリラルヌ、アッタラシャヌ クンヌラヨー

古見を代表する歌謡〈古見ぬ浦節〉に振付けられた、若衆2人、女4人、二才2人の、立方による打組みの構成で、それぞれ、独特な採りものを持つ舞踊である。立方の手にする採りものは次のとおりである。

採り物

若衆＝ジンボウ（銭棒）

銭太鼓芸能のときの採りものの1つ。約30センチの朱漆塗りの竹管の両端に、穴あき硬貨を取り付けた形態で、舞うときはそれを両手に採り、管の両端を交互に打ちつけて鳴らす。銭太鼓を打つ枹にも使う。

女＝ジンビキ（銭引き）

銭太鼓芸能のときの採りものの1つ。長さ約30センチ、巾3センチの朱漆塗りの2枚の竹片の一端を紐でとめ、上部の一片の端に穴あき硬貨を取り付ける。下部の一片の両脇を、長さ20センチ、巾2センチほどの片側に、鋸歯状の歯をきざみ込んだササラコでこすり、竹片と硬貨の音をひびかせつつ、さらに上下の竹片を打ち合わせ、鳴らすようにつくられている。

二才＝シノー（銭太鼓）

銭太鼓芸能のときの採りものの1つ。直径30センチ程、片面張りの太鼓で、その形態は太鼓の空洞に、針金を十字に張り、穴あき硬貨を取り付けたもので、表皮を打つときの振動で、中の硬貨も鳴るように調えられている。しかし古見では、太鼓に準えた、曲げものの丸枠の片面を紙張りにし、黒い三つ巴紋を描いた採りものになっており、それをシノーと称し、2張りを左右の手に採り持つ。

女＝四ツ竹

左右の掌に四ツ竹を採り打ち鳴らし、所作する。

芸能は、実に簡素で、〈古見ぬ浦節〉の歌持ちにつれ、銭引きを取るスディナ・カカン装いの者を先頭に、銭棒を取る若衆装いの者・四ツ竹を取るスディナ・カカン装いの者・シノーを取る二才装いの者の順に下手幕より出、続いてその逆の順で他の列が舞台に出て、2列に並ぶと、歌が唱い出されて所作

が始まる。それぞれの所作は、採り物すなわち、左手に取った銭引きを右手のササラコで引く。左右の手に採った銭棒の両端を交互に打ち鳴らす。両手の四ツ竹を打ち響かす。シノーを持つ左右の手の手首を、交互に打重ねる。以上のような単純な所作を繰返しつつ、列の形を縦横自在に変えながら踊る。

扮装

銭引きを採る者

頭部の髷の頂にチヅバナ（頂花）を挿し、髷下横左右にスババナ（側花）を挿す。額にマイタティ（前立）を当て、その上より重ねて赤長巾を締め、後頭部で結び、2筋のナミカンザシ（波簪）とともに垂らす。衣裳は、白カカン（掛裳）の上より紺スディナ（小袖）を着し、白足袋履きの装い。

銭棒を採る者

頭部の髷の頂にチヅバナ（頂花）を挿し、髷下横左右にスババナ（側花）を挿す。額にマイタティ（前立）を当て、その上より紅白の鉢巻を締める。衣裳は、緋色のスディフリ（振袖）を着し、角帯を締め、白地に藤波模様紅型のスジカキ（総地掛）を羽織り、白足袋履きの装い。

四ツ竹を採る者

頭部の髷下横左右にスババナ（側花）を挿し、額にマイタティ（前立）を当て、その上より重ねて赤長布を締め、後頭部で結び垂らす。衣裳は、白カカン（掛裳）の上より白地赤縞縞のスディナ（小袖）を着し、白足袋履きの装い。

シノーを採る者

頭部に白鉢巻を前結びに締め、衣裳は、紺地のタナシ（単物表衣）に茶色の角帯を結び、腰に紫長巾で扱き締めになし、白黒縦縞脚絆を付け、白足袋履きの装い。

8. ターカシ（田耕）狂言

この芸能は古見独自のキョングンで、結願祭のみに演じられるもので、登場人物は、村の総代役とその使いの者3人(カマダー、ツクリャー、マツァー)で構成されている。

セリフは古見の方言で、日常会話と同じように語られる。いわゆる〈島狂言〉である。

狂言の筋は、村の総代が使いの者3人へ、自分の田の荒打ちを云いつける。初めは真面目に働いていたが、そのうちに2人の者は、いろいろ口実をもうけて怠け、昼寝を決め込んでしまう。それでも真面目に働いていた1人が、田の中から金塊を掘り当てる。怠け者の2人が自分たちにも分け前があると、主張したため、3人は総代に決着をつけてもらうよう申し出る。事情を聞いた総代は、3人のうちで一番歳かさのものを、金塊の所有者にするという。よってそれぞれ自分が歳かさであることを主張する。マツアーは、自分はこの村が茶碗一つにも満たない時から生まれている者だという。ツクリャーは、自分こそこの島の天と地とがまだ分かれないうちから生まれているのだという。最後に返答することになった、真面目なカマダーは、自分の嫡子はこの2人の者と同じ歳だと答える。それで総代はカマダーが最年長だとして、金塊をカマダーに渡す。怠け者の2人は幸運を逃した腹いせに、互に罵りながら下がってゆく。

狂言の中では効果を出させる演出として次の歌が唱われている。

〈伊計離節〉

- 1 いきよ いきよ はなりよ
ハ－リかゆてい はまよ
- 2 へんざめぬよ はまによ
ハ－リやまとうふに ちちゃんどー
- 3 きばりきばり きばりばどう
ハ－リ黄金や たぼらる

この狂言の扮装は、総代が紺地の着物に帯をしめた平服姿で素足、それに対し、蒲戸・津久利・松の3人は、頭部に白巾で、むこう鉢巻を結び、着付けは、白衣・白袴下に、白黒縦縞の脚絆を着け、黒足袋履きの装いである。

〈恩納節〉

- 1 首里めでいしばし 戻るみちしがら
恩納岳みりば 白雲ぬかかる
くいしさやまさてい 見ぶしゃばかい

〈さあさあ節〉

1 花んながみたい 戻るみちしがら

里や我が宿に 待ちゆらでむぬ

琉球舞踊系の女手踊りであるが、その特徴的ななより、面当て、がまくいれなどの技法がなく、八重山風にすがすがしい二人の立方によって踊られている。この踊りで興味深いことは、現在演じられている琉舞〈伊野波節〉の後段、〈長恩納節〉における所作に準ずる手振りが、随所にみられることである。すなわち「白雲ぬかかる」の、しらくむでい（白雲手）、「くいしさや」の、あぐあてい（顎当て）、「見ぶしゃばかい」の振返りの所作などがそれである。被っている花笠の顔面の縁のあたりで、両手をゆらめかせる手振りをなす本来の〈白雲手〉に対し、この場合は、顔面の手前で両手を前後に動かしており、顎当ても、顎に手を当て添えず、顎の下方で揃えた左手の指先を、右手が支えつつ立てる仕ぐさである。「見ぶしゃばかい」では、ただ単純に振向く所作で、笠の縁に手をかけ見上げる所作はない。それから、こねりの手振りを再度重ねて演ずるのも、他ではみられない特異な技法のように思える。後段ピキパ（退羽）では花笠をぬぎ、右手に採り持ち踊る。

この舞踊の扮装は、頭部鬘下左右にスババナ（側花）を挿し、マイタティ（前立）の後方にもつくり花を飾り、赤長巾を額から後頭部に締め結び垂らす。鬘後方下部の左右から白紙でこしらえたナミカンザシ（波簪）を挿し垂らし、花笠を被る。ちなみに、つくり花の形には椿が準えられている。着付けは、スディナ・カカン（小袖・掛裳）の上に黒襟をつけた薄紅地小紋紅型染めのバッデン（袷せ表衣）を打掛け、白足袋履きの装いで、右手に旅杖を採り持つ。

9. かしかき

ななゆみとうはてん 五色すみわきてい

今日ぬゆかる日に 経糸^{かし}ゆかきやびら

（干瀬節）

わくぬ糸経糸や くりかいしかきてい

里があけじ羽 御衣^{んす}ゆしらに

(七尺節)

経糸んかきみちてい 急じ立ち戻ら
里や我が宿に 待ちゅらでむぬ

(百名節)

琉球舞踊の系譜を延く2人立ちの女踊りで、五色の糸を巻きつけた^{かせ}総(ティバフ)と杵(ピナス)のつくりものを採り持ち踊る。

出羽に〈干瀬節〉、中羽〈七尺節〉、退羽〈百名節〉が使われており、芸能も琉舞の〈かしかき〉技法に準じながら、似て非なる程、思い入れの度合いが希薄で、手振りを尽さず、すかすがと踊られている。この舞踊にも、二重にコネル技法がみられる。

扮装は、〈恩納節〉における立方のそれに準じてなされているが、この舞踊では髷の頂にチィヂィバナ(頂花)を挿し加えている。

10. 山入らば(記述を割愛する)

11. 亀組(狂言)

〈亀組〉は古見の結願祭の舞台芸能の最終演目で、古見にしか伝承されていない。登場人物は武人の扮装をした〈頭大主〉(男性)1人と、海底の他界の〈女神〉1人の、2人だけである。

この演し物は、全体が組踊の影響の下に成り立っており、これが古見地生えのものではないことを推測させるが、これが何処から将来、何時頃から上演されたかは不明である。周辺の村に類似の芸能はなく、貴重である。さらにこの狂言は内容的にも、沖縄の伝統的かつ固有の観念であるニライカナイの豊穡他界観を見事に表現しており、この点でも注目される。

その筋立ては、頭大主がうらかな好天にさそわれ、魚釣りに浜へ出て、釣糸を垂れていると、当りがあるので、大魚がかかったと思い竿を上げてみると、それは魚ではなく亀であった。すると亀はただちに女の姿に変身、自分はこの世のものではなく、海底の他界(ニライ)の神だと唱え、そして女神は、人間の世界に豊穡をもたらすためにやってきたと告げる。頭大主は恐懼して、女神の捧げ持つ五穀の種子籠を授り、よろこびいさみ村へ帰る。

芸能は、頭大主・女神拵えの立方により、組踊風の唱えで、筋が進行する。

扮装、頭大主は、頭部に、赤地の裏をつけた黒の巾を被り、額に金色のサシマタ（鋏型）を当て、その上から紫長巾を締め、後頭部で結び垂らす。衣裳は、紺のタナシを裾短かに着け、腰部を紫長巾で扱き結び、右袖を片脱ぎになし、白黒縦縞の脚絆を着け、黒足袋履きの装いで、左腰脇に鞘に納めた刀を差しており、右手には釣竿を採り右肩にのせて構える。

女神は、頭部を、鬘にチィヂィバナを挿した女踊りの頭飾りに準じて拵え、衣裳は、市松模様紺緋のスティブターを着し、表衣に黒襟薄紅色小紋紅型のバッデンを、裾短かく、ウシンチーに着け、右袖は片脱ぎになし、白足袋履きの装いで、五穀の種子を入れた籠を、両掌で捧げ持つ。

演技が終わり、三線の奏する〈伊計離節〉の曲で次の歌が唱われると、それにあわせ、女神の後から、授かった種子籠を捧げ持つ頭大主が付き従いつつ退場する。

〈終幕のとき謡う歌謡・伊計離節〉

みりくゆぬ	ヨーハーリ	弥勒世の
なうるゆぬ	ヨーハイヤー	稔る世の
ぬしいでむぬ		主であるから
きゆぬ	ひぬ	今日の日の
くがにひぬ	ヨーハイヤー	黄金の日の
まさる	ひに	勝る日に

12. 獅子舞

結願祭の舞台棧敷の芸能が終了すると、シィシィパーシ（獅子舞）がなされる。

笛の旋律で、太鼓と銅羅の打ちひびくなか、額に白鉢巻を前結びになし、白衣にミンサー帯を締め、赤袴をかけ、白袴下穿きに、白黒縦縞の脚絆を付け白足袋だけを履き、右手に青くば団扇、左手に白巾を採り持つ、2人の女性のマンダパーシが、雄獅子の両側から、勢いをつけながら、ウツカンのミナカに出てくる。雌獅子もこれに従い出てくる。

2人のマンダパーシは、右手のクバ団扇と左手の白巾を、笛の旋律に合せ振りつつ、獅子を舞わせる。後段で、雌獅子を地上に伏せさせ、その背上を雄獅子が飛び越える所作がある。この所為は、豊穰予祝の呪術性表現のように感じられる。

きわだった舞の型はないようであるが、古格を備えた獅子頭の端正な相貌に、そのかみの古見村の豊かさを垣間見たと思った。

4. その他の芸能

これまでは、古見の年中行事中、祭祀に伴う奉納芸能を見聞のままに収束羅列した。よって、この稿では、祭祀にかかわりなく、人々の生活のなかで、継承されている多岐にわたる、雨乞い歌・ユングトゥ・ユンタ・ジラバ・節歌・童唄などを述べ並べてみたい。

アマグイ歌

1. 雨乞い歌（アマツィツィ）

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 古見ぬ世や 雨ど世
アミュフシヤヌ 〈囃子〉
美世底や 水ど世
ミジュフシヤヌ 〈囃子〉 | 古見村の世は雨が世
アミュフシヤヌ
美与底 〈古見の異称〉 村は水が世
ミジュフシヤヌ |
| 2 | 雨ど世で やりやおうりて
水ど世で やりやおうりて | 雨が世でありなさって
水が世でありなさって |
| 3 | なゆとがみ 雨給ぼらぬ
いかとがみ 水給ぼらぬ | 何を咎めて雨をくださらないのか
如何を咎めて水をくださらないのか |
| 4 | なゆとがみ やらばん
いかとがみ やらばん | 何を咎めるのであっても
如何をとがめるのであっても |
| 5 | 山々ぬ 前なが
森々ぬ 前なが | 山々 〈御嶽御嶽〉 の前に
杜々の前に |
| 6 | うむる 水かきすい
手むる 水かきすい | ウムル水を掛け添え
手むる水を掛け添え |

- | | | |
|----|--|--|
| 7 | ばがにがい しやるば
くり手ずり しやるば | 私が願いを申しますから
これ〈私〉が手摺り〈祈願〉を申
ますから |
| 8 | ばがにがゆる 夜 ^ゆ から
くり手ずりゆる 夜から | 私が願う夜から
これが手摺りする夜から |
| 9 | 古 ^く 見 ^み 岳 ^{たけ} ぬ 上から
八 ^や 重 ^い 岳 ^{だき} ぬ 上から | 古 ^こ 見 ^み 岳 ^{たけ} の上から
八 ^や 重 ^え 岳 ^{たけ} の上から |
| 10 | 雨 ^あ 雲 ^み ぬ 立ちおうる
ぬり雲ぬ 立ちおうる | 雨雲が立ちなさる
乗り雲が立ちなさる |
| 11 | うりど雨 やりようる
くりど水 やりようる | それが雨でありなさる
これが水でありなさる |
| 12 | だらだらと 給 ^く ぼうり
どるどると 給 ^く ぼうり | ダラダラとください
ドルドルとください |
| 13 | 大 ^う ましん 満 ^ん ちあぶり
中 ^{ちゆう} ましん 満 ^ん ちあぶり | 大 ^お 榊 ^{さかき} 〈田〉も満ち溢れ
中 ^{ちゆう} 榊 ^{さかき} 〈田〉も満ち溢れ |
| 14 | 田 ^た 原 ^{はら} かず 打ち越し
なんき 押し流し | 田原ごとに打ち越え
なんき〈未詳〉を押し流し |
| 15 | いんじむる 打ち越し
黒 ^{くろ} 島 ^{しま} 波 赤まし | インジ岡を打ち越え
黒 ^{くろ} 島 ^{しま} 波〈海〉を赤くして |

(『八重山小話』・『南島歌謡大成IV 八重山篇』所収。ルビは補った。)

上の歌とは別伝で、大底朝要氏が収集した新本ウナレ媼が伝承してきた「あまついづい」を紹介しよう。訳は割愛する。

2. あまついづい

- 1 エー古見ぬ世や 雨どう世
エー雨世ぶしゃぬ
エー美与底や 水どう世
エー水世ぶしゃぬ
- 2 エーなゆとうがみ 雨ぶしゃぬ
エー雨世ぶしゃぬ

- エーいかとうがみ 水おしやぬ
 エー水世おしやぬ
- 3 エーなゆとうがみ やりよらばん
 エー雨おしやぬ
 エーいかとうがみ やりよらばん
 エー水世おしやぬ
- 4 エーやまやまぬ まいなか
 エー雨世おしやぬ
 エーばがにかい すすさるば
 エー水世おしやぬ
- 5 エーむりむりぬ まいなか
 エー雨世おしやぬ
 エーくりていずいり すすさるば
 エー水世おしやぬ
- 6 エーばがにかゆる ゆるから
 エー雨世おしやぬ
 エーくりていずいる ゆるから
 エー水世おしやぬ
- 7 エー古見岳ぬ まういなか
 エー雨世おしやぬ
 エー八重岳ぬ まういなか
 エー水世おしやぬ
- 8 エー白雲ぬ たちゆるん
 エー雨世おしやぬ
 エーぬる雲ぬ たちゆるん
 エー水世おしやぬ
- 9 エーうりどう 雨やるばずい
 エー雨世おしやぬ
 エーくりどう 雨やるばずい
 エー水世おしやぬ

- 10 エーばがにがゆる ゆるから
 エー雨世ぶしゃぬ
 エーうむるぬ水に
 どうるどうるで たぼらる
 エーうぶびいたるぬ水に
 だらだらで たぼらる
- 11 エー田原かず みていついき
 エー雨世ぶしゃぬ
 エーますいかずい つんついき
 エー水世ぶしゃぬ
- 12 エーなーんぎ うついくひ
 エー雨世ぶしゃぬ
 エーいんじむり うついくひ
 エー水世ぶしゃぬ
- 13 エー前ぬ^{とう}海 あかまひ
 エー雨世ぶしゃぬ
 エーふすいまとう あかまひ
 エー水世ぶしゃぬ

御嶽の前で雨乞いをするとき歌う。最近ほとんど行われなくなったので、この謡を知る人も少ない。かつては小さい干ばつでは司が御嶽へ祈願するが、大干ばつときには司は夜籠りをし、村人の男女は三日または五日におよぶ大祈願をしたという。『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

ユングトゥ

次にユングトゥを掲げる。最初のものは大底朝要氏伝承のユングトゥである。

1. ゆんぐとう

- 1 ばいぬすいまからよ 南の島から
 いたふにまぬ ゆーりきゃん 板の小舟が流れ寄ってきたよ

- | | | |
|---|---|--|
| 2 | かたふづいらや くみじら
かたふづいらや あわじら
ついでつき ゆーりきやん | ひとつの葛籠は米葛籠
ひとつの葛籠は粟葛籠
積み載せて流れ寄って来た |
| 3 | やぬみかずいん ついでつき
きぶるかづいん なみつき | 家の数ごと積み搗き
世帯の数ごと並み搗き |
| 4 | ついでつきぬ あまりや
なみつきぬ ぬくりや | 搗きあげた余りは
並み搗いた残りは |
| 5 | あむるさきん まらしょうり
うふみしゃぐん ついくりょう
り | 泡盛酒を蒸留され
大神酒をつくられ |
| 6 | うぬさきぬ まりばな
うぬみきぬ ふきばな | この酒の生まれどき
この神酒の醸されどき |
| 7 | たるたるどう ついかいすい
ずいりずいりどう うとうむす | 誰々をお招きしょうか
どなたをばお供しょうか |
| 8 | ぶざさけら ついかいすい
ぶばまけら うとうむす | 叔父たちをお招きします
叔母たちをお供します |
| 9 | ななついなる みどうぬふあぬ
ういかい むついでついでついで
すいむかひ むついでついでついで
すいたんでゆ | 七つなる童女の
上に、ムツィムツィムツィ
下方へムツィムツィムツィ
したそうですよ |

2. ばがうん^だぬ^{まい}米

- | | | |
|---|---------------------|-----------------------|
| 1 | ばがうんだぬ まいやよ | 私の田の米はね |
| 2 | やむちいだぎ あんさいな | 家を持つほどあるでしょう |
| 3 | きくないむちいだぎ あんさい
な | 家内〈家庭〉を持つほどあるでしょ
う |
| 4 | くりみりよ おなりやーま | これみなさい 姉妹〈女子〉よ |
| 5 | くりみりよ びぎりやーま | これみなさい 兄弟〈男子〉よ |
| 6 | でいんゆっさり | と申し上げます |

「ばがうんだぬ まいやよ」という旋律と、「やむちいだぎ あんさいな」

という旋律が組み合わさり、以下これが繰り返されるユングトゥ。稲穂を積み上げた上に、茅で屋根をふいたくシラ（稲叢）を見て歌われるもので、わらべうた風に素朴に謡い、曲尾では〈ゆっさり〉と唱える。『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

3. かざふきゃ

- | | | | |
|---|-------------|---------|------------------|
| 1 | かざふきゃでいる | かざふきゃ | カザフキヤ〈セキレイ〉というカザ |
| | ヨー | | フキヤ |
| | ゆーふきゃでいる | ゆーふきゃ | ユーフキヤというユーフキヤ |
| | ヨー | | |
| 2 | にすいかじいぬ | うしゅらばヨー | 北風が押し〈吹い〉たら |
| | ばいかいむかいとうり | ふない | 南に向いてクイクイと（尾を上げ下 |
| | ふないヨー | | げし） |
| 3 | ばいかじいぬ | うしゅらばヨー | 南風が押し〈吹〉いたら |
| | にしいかいむかいとうり | ふない | 北に向いてクイクイと（尾を上げ下 |
| | いふないヨー | | げし） |
| 4 | ばーとうんなまでいー | ちいか | 私の小鳥だと（思って）捕まえた |
| | んだらどうヨー | | ころが |
| | ばーふたいば | ぐんかでい | く |
| | つけーして | | 私の額をこつんとつついて |
| | ばったる | んでいゆっさり | 行ってしまったと申しあげます |

このユングトゥは、鶴鴿が、立ち吹いてくる風に逆らうことなく、向を変えつつ尾羽を振るさまと、その素直さをひとりよがりに捉え、あげくは額をつつかれ逆手をとられた人間のおかしみが詠われている。

〈我がうん田ぬ米〉と同じ旋律型をもつユングトゥでもある。終りには早口で「ゆっさり」と唱える。『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

4. ふたんでいるま

- | | | | |
|---|----------|-------|-----------------|
| 1 | ふたんでいるまば | びっじいぬ | 蓋付き箆〈弁当ざる〉を肱に貫き |
|---|----------|-------|-----------------|

き

- | | | |
|---|--|------------------------------------|
| | かんでいるまば ぴっじいぬき | カン策〈ザルの名〉を肱に貫き |
| 2 | まいぬばま ぱーりうり
うやどうまりい とうびうり | 前の浜に走り行きまして
親泊に飛び行きまして |
| 3 | いたふねーまば ぴいきいうる
し
たなふにまば うしうるし | 板船っ子を引き下ろし
棚船っ子を押し下ろし |
| 4 | ぶざさなきゃーん ぬりおーり
ぶばまなきゃーん ぬりおーり | おじさんたちもお乗りになり
おばさんたちもお乗りになり |
| 5 | しじゃんかたきゃーや かじすい
かいり
うとうどうなきゃーや ふにく
ぎ | 兄者方〈先輩たち〉は舵を取り
弟〈後輩たち〉は船を漕ぎ |
| 6 | くぎなくぎ ぱーるけーどう
ゆしなゆし いくけーどう | 漕ぎに漕いで行くうちに
寄せに寄せていくうちに |
| 7 | ちんぼりゃーまぬ なるだどう
ゆーびぬくとう うむいだした
る
んでいゆっさり | 櫓杭が鳴ったので
昨夜のことを思い出した
と申し上げます |

このユングトゥは、西表島祖納の〈ぱなりみじゅゆんぐとう〉、小浜島の〈すとうむでいゆんぐとう〉と歌詞、旋律ともに同系のものである。

船を漕ぐときに鳴り軋む櫓杭の音から昨夜の閨事を思い出した、とする雰囲気づくりのために、第一節から第六節までは詠われており、性にまつわるひそかな笑いが、一篇の意図するところであろう。

終りに早口で、「ゆっさり」と唱える。『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

5. やどうぬさんぬ

- | | | |
|---|---------------------|------------|
| 1 | やどうぬさんぬ ふだちいべー
ま | 雨戸の棧の守宮っ子が |
|---|---------------------|------------|

- | | |
|-----------------|--------------|
| うーどうにうり さばなるけー | 大海に下り鱧になるまで |
| ばやけーらぬ いぬち | 私たちの命が |
| くんとうとうむに あるにがい | 古見と共にある願い |
| しまとうとうむに あるにがい | 島と共にある願い |
| 2 かーらぬはたぬ やまめーま | 川原の端の山亀っ子が |
| うふどうにうり かみなるけー | 大海に下り海亀になるまで |
| ばやけーらぬ いぬち | 私たちの命が |
| しまとうとうむに あるにがい | 島と共にある願い |
| くんとうとうむに あるにがい | 古見と共にある願い |

このユングトゥは、西表祖納の、〈かあぬばたぬあぶだーまゆんぐとう〉、竹富島の〈ぬちがふゆんた〉と歌詞、旋律ともに同系のもので、古見の村とともに村人の永続を念ずる表現として、実現不可能なことが実現するまで、すなわち無限の時間、永遠に在らせ給えと祈る寿ぎの歌である。『日本民謡大観・八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

6. ぴいとうりいあるみどうぬふあー

- | | | |
|---|----------------|-------------------|
| 1 | ぴいとうりいある みどうぬふ | 独りある女の子 |
| | あー | |
| | たんがーぶる きいむぬふあー | 一人居る肝〈心〉の子を |
| 2 | ぶどうぬやーかい やらしょう | 夫の家へ嫁がせました |
| | り | |
| | とうぬぬやーかい いかしょう | 殿の家へ嫁がせました |
| | り | |
| 3 | いきからぬ みちいきい | 嫁いでからの三月 |
| | むむかよーんざん ならぬけ | 百日さえもならないうちに |
| 4 | なしやねーぬ いきていず | 産し〈子供〉はないから帰りなさい |
| | | と |
| | まりやねーぬ ぱりていず | 生まれ〈子供〉はないから行きなさい |
| | | いと |
| 5 | いきていから ゆむみしゃ | 行けといわれれば えー よい |

- | | | |
|----|-----------------|-----------------|
| | ぱりていから ゆむまい | 行けといわれれば 仕方ない |
| 6 | なしゃるうや わりやどうる | 産みの親の家もあるのだから |
| | だぎやるあぶ わりやどうる | 母親の家もあるのだから |
| 7 | ゆぬみついに むどうりき | 同じ道を戻ってきた |
| | ゆぬあすいに かいりき | 同じ足跡を踏み帰ってきた |
| 8 | まんがから いりまき | 真正面から入るのをためらい |
| | すばゆから いりまき | 側から入るのをためらい |
| 9 | あまんぎすぬ すいたなか | 雨だれの下に |
| | かんぐいすいぬ ういなか | カンデース〈羽留石〉の上に |
| 10 | ゆむなゆむ ぶるけどう | たゆたっておると |
| | なきななき ぶるけどう | 泣き泣きおると |
| 11 | なせるうや わりやみり | 母親がおいでになってみられて |
| | だぎやるあぶ わりやみり | 母親がおいでになってみられて |
| 12 | なゆばしどう かしゃらぐ | 何故にここにきたのか |
| | いかばしどう かしゃらぐ | 如何なる訳でここにきたのか |
| 13 | なしやねぬ いきていす | 子を産まないから行きなさいと |
| | まりやねぬ ぱりていす | 子ができないから戻りなさいと |
| 14 | いきていから ゆむみしゃ | 行けというならよいではないか |
| | ぱりていから ゆむまい | 帰れというならよいではないか |
| 15 | なゆでいうむいな みどうぬふあ | なにも思いわずらうな娘よ |
| | いかでいうむいな くいむぬふあ | 如何も考えわずらうな可愛い娘よ |
| 16 | すいているすや たんかよ | 捨てる者は独りだけだよ |
| | ぬずいむむすや むむすよ | 望む者は百名もおるよ |
| 17 | うついんかいいり みどうぬふあ | 家内に入りなさい娘よ |
| | すくんかいいり くいむぬふあ | 屋敷に入りなさい可愛い娘よ |
| 18 | すくいとうり びりょうり | 麻笥のそばに座りなさり |
| | ぶ一むとうとうり さぐりょうり | 苧麻の束をとってほどきなさり |
| | り | |
| 19 | いきていから みみついくい | 嫁ってから三ヶ月 |
| | むむかよんざん ならぬけ | 百日さえもならぬのに |

- | | | |
|----|--------------------------------|---------------------------------|
| 20 | とうぬすくぬ まつんがに
まつんがにぬ にしゃから | 登野城の松金
松金のもとから |
| 21 | くいむぬば やらしより
なかだついば やらしより | 請いうける者を行かしめ
仲介の者を使わし |
| 22 | くいむぬば うきやとうり
なかだついば とりやうき | 請いの口上を受け
仲介の口上を受け取り |
| 23 | ふさでいから さりやわり
ぬづいみから いりやわり | 欲しいのなら連れて行きなさい
望みならもらって行きなさい |
| 24 | ていとうりいか みどうぬふあ
さふきいか くいむぬふあ | 手をとって行こう娘さんを
引いて行こう請いうけた娘さんを |
| 25 | ていとうりどう いくなば
さふかりどう いくなば | 手をとられていくのか
引かれつついくのか |
| 26 | ていだいらば ぱりくんさ
ゆぬいらば ぱりくんさ | 太陽が沈んだら走ってくるさ
夜に入ったら走ってくるさ |
| 27 | いきていから みみついくい
むむかよんざん ならぬけ | 嫁ってから三ヶ月
百日も経たないのに |
| 28 | びふないつい まらしょうり
みどうななな くぬみょうり | 男児五人を出産しました
女児七人を出産しました |
| 29 | うんからぬ みどうぬふあ
うんからぬ くいむぬふあ | それからの女の子
それからの肝の子〈大切な子〉 |

この謡は、古見の種子取祭儀のとき唱えられるユングトウのひとつで、小浜島の〈じらばがぬ松金ゆんぐとう〉と歌詞内容は同じ。

古い時代の習俗を背景にしており、他家へ嫁したひとり娘が、子を産まないため実家へ帰されるやるせなさを淡々と詠っている。『日本民謡大観(沖縄・奄美)八重山諸島篇』(日本放送協会編)には、その第1～6節までが収録されている。

ユンタ

1. ぶなれーまゆんた

1 チンダラ

くんのーらぬ

古見浦の

ぶなれーま ヨ

ブナレーマよ

サーユヤサー

イラヨ ティユバナウリ

2 チンダラ

みゆしくぬ

美与底の

みやらび ヨ

乙女よ

サーユヤサー

イラヨ ティユバナウリ

3 チンダラ

うるちいぬ

陽春に

なりよだら ヨ

なったら

サーユヤサー

イラヨ ティユバナウリ

4 チンダラ

ばがなちいぬ

若夏に

いちゆだら

なると

サーユヤサー

イラヨ ティユバナウリ

5 チンダラ

かないぬぬぬ

貢納布の

ぬしなり

ゆえに

サーユヤサー

イラヨ ティユバナウリ

6 チンダラ

とういるぬぬぬ

十尋布が

- | | | |
|----|-------------|----------|
| | むとうなり | もとで |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 7 | チンダラ | |
| | かないぬぬば | 貢納布を |
| | とうりゃむち | 取り持ち |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 8 | チンダラ | |
| | とういるぬぬば | 十尋布を |
| | うきとうり | 受け取り |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 9 | チンダラ | |
| | まいとうまり | 前泊〈前の浜〉に |
| | ぱりうり | 走り降り |
| | サーユイサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 10 | チンダラ | |
| | うやどうまり | 親泊に |
| | とうばしょーり | 飛ばし来て |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 11 | チンダラ | |
| | ならふにば | 汝の〈私の〉船を |
| | うしだし | 押し出し |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 12 | チンダラ | |
| | とうむだがば | 臙高を |

- | | | |
|----|-------------|--------|
| | びいきいうるし | 引き下ろし |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 13 | チンダラ | |
| | かないぬぬ | 貢納布を |
| | とぅりぬひ | 取り載せ |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 14 | チンダラ | |
| | とういるぬぬ | 十尋布を |
| | むたいぬひ | かつぎ載せ |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 15 | チンダラ | |
| | いしゃなぎんが | 石垣（島）に |
| | ぱりうり | 走り降り |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 16 | チンダラ | |
| | うやしいまん | 親島に |
| | とうばしょーり | 飛ばし来て |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 17 | チンダラ | |
| | じいまじいまどう | どこどこに |
| | ふなちいき | 船を着けるか |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 18 | チンダラ | |
| | じいまじいまどう | どこどこに |

- | | | |
|----|--|---------------|
| | やどうとうりや
サーユヤサー
イラヨ ティユバナウリ | 宿をとるか |
| 19 | チンダラ
みしゃぎぬまいどう
ふなつき
サーユヤサー
イラヨ ティユバナウリ | 美崎の前に
船をつけ |
| 20 | チンダラ
うらぬまいや
やどうとうり
サーユヤサー
イラヨ ティユバナウリ | 蔵元の前に
宿をとり |
| 21 | チンダラ
うふうらん
ぱりぺーり
サーユヤサー
イラヨ ティユバナウリ | 大蔵元に
走り入り |
| 22 | チンダラ
ながうらん
とうばしいき
サーユヤサー
イラヨ ティユバナウリ | 長蔵元に
飛ばし行き |
| 23 | チンダラ
しらびしゅん
おーるんかや
サーユヤサー
イラヨ ティユバナウリ | 調べ主も
おいでか |
| 24 | チンダラ
ていふぬしゅん | 文子の主も |

- | | | |
|----|-------------|---------|
| | おーるんかや | おいでか |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 25 | チンダラ | |
| | しらびしゅ | 調べ主に |
| | ぬーふんでい | 何をするのか |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 26 | チンダラ | |
| | ていふぬしゅぬ | 文子の主に |
| | いかすんでい | 如何するのか |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 27 | チンダラ | |
| | かないぬぬ | 貢納布を |
| | うさむんでい | 納めようと |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 28 | チンダラ | |
| | とういるぬぬ | 十尋布を |
| | おいすんでい | お上げしようと |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 29 | チンダラ | |
| | ないばかり | 長さを測れ |
| | うらぬしゅ | 蔵元の主 |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 30 | チンダラ | |
| | ゆくばかり | 幅を測れ |

- | | | |
|----|-------------|---------|
| | しらびしゅ | 調べ主 |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 31 | チンダラ | |
| | ないばかりぬ | 長さ測りの |
| | かいしゃ | 美しさよ |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 32 | チンダラ | |
| | ゆくばかりぬ | 幅測りの |
| | やばは | 柔らかなことよ |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 33 | チンダラ | |
| | かないぬぬ | 貢納布を |
| | おいしった | お上げた |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |
| 34 | チンダラ | |
| | とういるぬぬん | 十尋布も |
| | うさみた | 納めた |
| | サーユヤサー | |
| | イラヨ ティユバナウリ | |

(『竹富町古謡集・第一集』所収)

古見村を代表する古謡である。

ブナレーマが、織りあげた貢納布を懇に船で石垣島へ運び、蔵元政庁へ納租するまでのありさまを詠ったユンタである。

ブナレーマは、をなり（姉妹）のことで、特定の女性を指す固有名詞ではなく、普遍的に古見村の一般女性のことだと思われる。

2. ぶなれーまじらま

- | | | |
|---|--|----------------------------|
| 1 | くんのらぬ ぶなれーま
みゆしくぬ みやらび
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ | 古見の浦の ブナレーマ
美与底の 女童 |
| 2 | うるちいぬ なりよだら
ばがなちいぬ いちゆだら
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ | 陽春に なると
若夏に なると |
| 3 | かないぬぬぬ ぬしなり
とういるぬぬぬ むとうなり
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ | 貢納布の ゆえに
十尋布が もとで |
| 4 | かないぬぬば とうりゃむち
とういるぬぬば うきとうり
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ | 貢納布を 取り持ち
十尋布を 受け取り |
| 5 | まいとうまり ぱりうり
うやどうまり とうばしょーり
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ | 前泊(前の浜)に 走り降り
親泊に 飛ばし来て |
| 6 | ならふにば うしだし
とうむだがば ぴいきいうるし
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ | 己の船を 押し出し
艫高を 引き下ろし |
| 7 | かないぬぬ とうりぬひ
とういるぬぬ むたいぬひ
ヤリクヌ ウーヌ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ | 貢納布を 取り載せ
十尋布を かつぎ載せ |
| 8 | いしゃぎんが ぱりうり | 石垣(島)に 走り降り |

- うやしいまん とうばしょーり 親島に 飛ばし来て
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 9 じいまじいまどう ふなちいき どこどこに船を 着けるか
じいまじいまどう やどうとう どこどこに 宿をとるか
りや
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 10 みしゃぎぬまいどう ふなつき 美崎の前に 船を着け
うらぬまいや やどうとうり 蔵元の前に 宿をとり
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 11 うふうらん ぱりペーり 大蔵元に 走り入り
ながうらん とうばしいき 長蔵元に 飛ばし行き
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 12 しらびしゅん おしるんかや 調べ主も おいでか
ていふぬしゅん おーるんかや 文子の主も おいでか
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 13 しらびしゅぬ ぬーふんでい 調べ主に 何をする
ていふぬしゅぬ いかすんでい 文子の主に 如何するのか
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 14 かないぬぬ うさむんでい 貢納布を 納めよと
とういるぬぬ おいすんでい 十尋布を お上げしよう
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 15 ないばかり うらぬしゅ 長さを測れ 蔵元の主
ゆくばかり しらびしゅ 幅を測れ 調べ主

- ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 16 ないばかりぬ かいしや 長さ測りの 美しさ
ゆくばかりぬ やばは 幅測りの 柔らかさ
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ
- 17 かないぬぬ おいした 貢納布を お上げた
とういるぬぬん うさみた 十尋布も 納めた
ヤリクヌ ウーネ
ユシーヌ ヤリクヌサーサ

〔竹富町古謡集・第一集〕所収

〈ぶなれーまゆんた〉と同じ内容であるが、節の構成が異なっている。すなわち、〈ぶなれーまゆんた〉の、対句的な二節づつを、一節に繋ぎ纏めた、対句的構成になっている。

演じられるときは、ゆんたの〈トーシィ〉として詠われており、曲調も軽快なリズムに転調する。

3. いしゃぎょーに

- 1 いしゃぎょーにぬ ヨーサ 石垣船が
かりゆしぬ んまりた 嘉利吉〈船の美称〉が生まれた
ヨーホーナー
- 2 きゆぬびいに 今日の日に
かんぬびいば いらびょーり 神の日を選びまして
- 3 ひぬとうらぬ 丙寅の
かんぬびいば いらびょーり 神の日を選びまして
- 4 イヤ なしるうや ホイホー イヤ 産んだ親は ホイホイ
ホイ うやがみ ホイ 親神
サーユイヤーサ サーユイヤーサ
うむたら 思ったら〈祈ったら〉
ヨーホーナー ヨーホーナー

航海や旅行に先立ち、その平安無事を予祝して歌われた。石垣市宮良に伝わる〈いしゃじょーにゆんた〉を参考にすると、もともこの歌謡の内容は大きく三段に分かれ、まず前段で石垣船の出自の聖性を詠い、中段では船の外観の美しくすぐれたさまが詠われており、後段では、乗船する役人の平安成就が予祝的に詠い納められている。『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

4. ばいさくだぬゆんた

- | | | |
|---|---|----------------------------------|
| 1 | ばいさくだヨー
むむすりぬ ちかさまヨーイ

イラヨ ティ バナウレ | 南サクダ〈地名〉
ムムスリ〈地名か〉のチカサーマ〈女名〉 |
| 2 | まりるかい
くんのーらに まれーらば
イラヨ ティ バナウレ | 生まれる甲斐（ある）
古見の浦に生まれてあれば |
| 3 | しでいるかい
みゆしくに しでいらば
イラヨ ティ バナウレ | 躰でる〈生まれる〉甲斐（ある）
美与底に躰でてあれば |
| 4 | くんぬしゅーぬ
みやらびとうずいでん いやり
みゆば
イラヨ ティ バナウレ | 古見の主〈お役人様〉の
女童妻〈あそびめ〉と言われたものを |
| 5 | しゅぬまいぬ
かくりとうずいでん いやりみゆ
ば
イラヨ ティ バナウレ | 主の前〈お役人様〉の
隠し妻といわれたものを |
| 6 | ばいさくだ
すいまぎくいに まりぶり
イラヨ ティ バナウレ | 南サクダの
島崎〈地名〉に生まれていて |
| 7 | やまぬきぬ | 山の木の（ように） |

- ぴいとうすいさぬ まりばし
 イラヨ ティ バナウレ
 8 すいくぬきぬ
 ゆすすいさぬ すでいばし
 9 うむだでん
 なゆだでん なゆすが
- 人の知らない生まれをし
 底の木の（ように）
 与所の知らない生まれをし
 思ったとしても
 （悲しみを）述べたとしても、何と
 しよう（どうにもならない）

パイサクダのシマザキという寒村に生まれた娘が、生まれ甲斐のある古見に生まれていたら、お役人様の隠し妻にもなれたものをと、山間の村に生まれたばかりに、自分の存在さえも他には知られないやるせなさを、しみじみ述べている。『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

5. ばいさくだーぬじらば

- 1 ばいさくだ
 むむすりぬ ちかさーま
 ヤナゲバホーリヌホイトーヤ
 2 ヤ まりるか
 くんのーらに まりらば
 3 ヤ しでいるかい
 みよしくに しじらば
 4 ヤ くぬしゅーぬ
 みやらびとうじで いやりむば
 5 ヤ しゅぬびゃくぬ
 かくりとうじで いやれむば
 6 ヤ ばいさくだ
 しまぎきに まれぼり
 7 ヤ やまぬきぬ
 ひとつしらぬ まりばし
- 南サクダ〈地名〉
 ムムスリ〈地名か〉のチカサーマ〈女名〉
 生まれる甲斐（ある）
 古見の浦に生まれてあれば
 孵でる〈生まれる〉甲斐（ある）
 美与底に孵でてあれば
 古見の主〈お役人様〉の
 女童妻〈あそびめ〉と言われたものを
 首里大屋子〈役職名〉の
 隠し妻と言われたものを
 南サクダ
 シマザキ〈地名〉に生まれていて
 山の木の（ように）
 人の知らない生まれをし

- 8 ヤ しくぬきぬ 底の木の（ように）
 ゆすしらぬ まりばし 他所の知らない生まれをし
- 9 ヤ うむたでーん 思ったとしても
 なみだでーん なゆしゅーが （悲しみを）述べたとしても何とし
 よう（どうにもならない）

〈ぱいさくだぬゆんた〉の歌詞に準えた、同じ内容を持つジラバで、トゥーシィ的機能を果していることが窺える。『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

節 歌

1. 古見口説

1 八重に花咲く古見ぬ島

色香まさらし梅桜

わらび踊いゆながむりば

サティムサティサティ フタガザミュサミ トウカグシユアミ グ
 ニツイマフェカジ ヤファヤファタボーティ グーックムヂクイ マ
 ンマンマンサク トウシニトウシグトウ アヌヤン カヌヤン ウデェー
 サカムチ サミトウサカジキ ナナーチ ナナーチ ヤーチ ヤーチ
 スシドゥ マタンチャ ウムシリムヌサミ サーアッサ

2 千代んかわらんいらぶかた

みるに昔ぬしぬばるる

からりくるりとうひちぐるま

サティムサティサティ マシヌマシカジ イニヌユカドゥヤ ミミシ
 リトウヌジャ イイツティミツチャヤ シルヒジャサシクミ フワー
 ヌンディシヤ ショウブヌフワーサミ チジニユタリバ サンビヤク
 サンジューナナチジアヤビン アリガウハチヤ カミニウサギティ ニ
 ングジョウノー キックニウサミティ ヌクイアマイヤ ヤシチヌマ
 ンマル マジックナビティ アマザキカラザキ ダティクンソーティ
 ドゥ ウイムワカジム ミナジム スルユティ ヌダイアシダイ ウ

ドゥイハニスセ ウムシリムヌサミ サーアッサ

- 3 しだれ柳をおいのせて
庭のおもには出にききやり
露の玉たるさてい見事
- 4 やさしい心のみやらびの
かりが打振ふちしがた
風に馴れたる糸柳
- 5 そるう拍子の面白や
貫きて留たるむりく花
糸のいんとは是やらん
- 6 あかりしょうじょう月明て
つなぎとみたる東小島
見るにつきては恋しさよ
- 7 思いよろびの並枕
いつの世にかは忘るべき
糸と思わば浮鏡
おつる面影の立よまさる

この口説は、結願のときの奉納芸能の〈長者〉で、一節を一番狂言と称して、〈ツクドゥン〉が、二節目を二番狂言と称して、〈ペーチン〉が囃子詞を唱えながら演じる。

2. はしいゆば節

- | | | | |
|---|---------|----------|--------------|
| 1 | くんのーらぬ | はしいゆばヨー | 古見の浦の橋の世を恵まれ |
| | みゆしくぬ | はしいゆばヨー | 美与底の橋の世を給わった |
| 2 | みなとうまどう | やだそーぬヨー | 小湊での入江であったが |
| | やらぎまどう | やだそーぬヨー | 泥湿地の入江であったが |
| 3 | くんぬしゆに | しやりていヨー | 古見のお役人に申しあげて |
| | しゆぬまいに | うぬぎていヨー | 主の前に言上して |
| 4 | うふいしゃぎ | わたりょうりヨー | 大石垣に渡って行き |
| | うやじいまに | うつりょうりヨー | 親島に赴いて |

- | | | |
|----|------------------------------------|-------------------------------|
| 5 | うきなあしゆに しやりていヨー
かしらしゆーに うぬぎていヨー | 在番に陳情し
頭役に申請して |
| 6 | むらむらぬ ぶばゆしヨー
ゆすばらぬ ぶばくいヨー | 村々より人夫を寄せ集め
他島より人夫を請い入れ |
| 7 | くんぬうらに わたりょうりヨー
みゆしいくに うつりょうりヨー | 古見の浦に渡ってきました
美与底に寄ってきました |
| 8 | みどうなしや いしぴきヨー
びふなしや ついんついきヨー | 女性は石を持ち運び
男性は石積みをなし |
| 9 | ひきちゆらさ みどうなしヨー
なみかいしゃ びふなしヨー | 石運びの巧みな女性たちよ
並美しく石積む男性たちよ |
| 10 | しんざいぬ むとうからヨー
ぷしいざきぬ ちいびまでいヨー | 三離橋の起点から
大枝橋の終点まで |
| 11 | たるぬしゆぬ うかぎにヨー
じいりぬやーぬ みぶきにヨー | お役人どなたのお陰でしょう
お役人だれのお陰でしょう |
| 12 | くんぬしゆぬ うかぎにヨー
しゆぬまいぬ みぶきにヨー | 古見のお役人のお陰です
主の前のお陰です |

古見村南方の前良川に架かる橋を三離橋と称し、北方後良川に架かる橋を大枝橋と称している。この橋は1715年尚敬王世代、古見首里大屋子役職であった山陽姓長休の、王府への請願陳情によって、木橋しか存在しなかった当時、画期的な石積みの橋が構築されたもので、その経緯が詠われている。

3. やーつくりぬゆんた

〈本句〉

- | | | |
|---|--|-------------------------------------|
| 1 | きゆぬぴいば
いらびょーりヨーホーホーイ
くがにぴいーばヨー
しらびょーりヨー | 今日の（佳き日を）
選びなさり
黄金日を
調べなさり |
| 2 | みうぶやーば
ちくりょーりヨーホーホーイ
みぬくいやばヨー | 新しい大家を
造りなさり
貫家を |

- | | | |
|----|--|-------------------------------------|
| | くさようりヨー | 拵えなさり |
| 3 | たるたるぬ
ならしょうたヨーホーホーイ
ずいりずいりぬヨー
すいかしょうたヨー | 誰々が
教えましたか
誰々が
聞かせましたか |
| 4 | だいくしゅぬ
ならしょうたヨーホーホーイ
ぴいぬかんぬヨー
すいかしょうたヨー
〈チィラシ〉 | 大工主〈棟梁〉が
聞かせました
火の神が
教えました |
| 5 | アフアリ きゆぬぴいーば
しらびょーり | |
| 6 | アフアリ くがにぴいーば
ちくりょーり | |
| 7 | アフアリ みうぶやば
ちくりょーり | |
| 8 | アフアリ みぬくいやーば
くさようり | |
| 9 | アフアリ たるたるぬ
ならしょうた | |
| 10 | アフアリ ずいりずいりぬ
すいかしょうた | |
| 11 | アフアリ だいくしゅうぬ
ならしょうた | |
| 12 | アフアリ ぴいぬかんぬ
すいかしょうた | |

新築祝いの室寿ぎの歌である。本句とチィラシの二曲で構成され、歌詞も共通で、本句一節の詞句が、チィラシでは二節に分けられている。

4. 揚古見ぬ浦節

- | | | |
|---|--|---|
| 1 | かみしむん するゆていヨー
にがたくとう ハーリ かなしよ
りヨー
スリヌイー イチン ウリシャ
バカイヨー | 上役人から、下庶民に至るまで揃っ
て
願ったことを、かなわせてくださり
何時もうれしさばかりです |
| 2 | くとうしとうし まさらしヨー
まあるとし ハーリ ゆくだら
ヨー | 本年は豊かな稔りを賜った
来る年も、今年を凌ぐ豊穰を恵み給
うであろう。 |

『日本民謡大観・八重山諸島篇』日本放送協会編。参照。

5. やぐじゃーま節

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | うさいぬとうまりぬ
やくじゃーまぬ サーヤクザイ
ちくでんぶし ながみる
ヤイスーリヌ | 村番所の泊に棲む
ヤクジャーマ〈蟹名〉が
作田節を歌っている |
| 2 | うりからとうなりいぬ
しらかやぬ サーヤクザイ
さみしんばびいき ながみる
ヤイスーリヌ | それから隣の
シラカヤ（蟹名）が
三線を弾き歌っている |
| 3 | うるじいぬ ばがなちいぬ
サーヤクザイ なりよーたら
いざらりる くとううむい
ヤイスーリヌ | 初夏に若夏に
なると
漁られることを思い |
| 4 | うまゆみりばん かまゆみりば
サーヤクザイ たいぬぴいーや
あからばたら ぱりゃきーば
ヤイスーリヌ | ここを見ても あそこをみても
たいまつの火を
赤く弾け燃やして走ってきます |
| 5 | うぶちいみゆ かなちいみゆ | 大爪を 鉄爪を |

- サーヤクザイ おちゆるばたら ぼきりぼきりと
 でい
 かさらりるしんさや 折られることの苦しさよ
 ヤイスーリヌ
- 6 なゆたぬみ いきゃたぬみ 何を頼みにして、如何を頼みにして
 サーヤクザイ たぬまぼどう 頼みにしてこそ
 ぼどうぬかき しやりる 自らの防ぎにすればよいであろうか
 ヤイスーリヌ
- 7 うふついぶし とうんだぶし 大きな膝、腓こそを、
 サーヤクザイ たぬまぼどう 頼みにしてこそ
 ぼどうぬ かきしやりる 自らを守る術にしていこう
 ヤイスーリヌ
- 8 うらたぬくびるとう やまだぬ 浦田の鶺鴒と山田の鶺鴒が
 くびる
 サーヤクザイ ふわばなし 子鳥を孵して
 うたいすせむぬぬ うむしるむ ウタイステムヌが面白い
 ぬ
 ヤイスーリヌ
- 9 がさみぬ ぱらみうるふわや がさみ蟹の孕んでいる子は
 サーヤクザイ
 たーふわねーら しゅぬまい どなたの子でしょうか お役人
 ヤイスーリヌ
- 10 まりるかい すいでいるかい 生まれる甲斐 孵でる甲斐
 サーヤクザイ
 がさみなか ふわば なしみや がさみ蟹の子を産んでみたいものだ
 むば
 ヤイスーリヌ

人頭税の圧政に苦しむ人々を、蟹に寓意して詠った擬人的表現の歌である。伊波普猷（1876-1947）は著書『古琉球』（1911）で「小さき蟹の歌」と題して、この民謡は、思想および言語の美しさがよく詠い込まれていると称賛し

ている。

6. ^{あーり}東から

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | ありからありおーる ちいくい
ぬゆー
ばんちゃぬ ていぢいまでい
あーりおーり
オーイチョーカ | 東から上がっておいでになるお月様
私の家の頂まで
上がっておいで下さい |
| 2 | うぶんまむんや
なんざゆーちい
なかまむんや
やすばゆーちい
オーイチョーカ | 長女姉さんのものは
銀のかんざし
次女姉さんのものは
やすばのかんざし |
| 3 | ぴいたるん ざーん
ねーなぶり
ちいんだみぬくるーば
ぴいたるばし
オーイチョーカ | 柄杓さえも
なくなって
かたつむりの殻を
柄杓にして |
| 4 | びしみ ざーん
ねーなぶり
やくんがいぬぐるば
びしみばし
オーイチョーカ | 水がめさえも
なくなって
夜光貝の殻を
水がめにして |

この歌は、八重山一円に広く流布するわらべ歌〈月ぬ美しや〉のヴァリエーションである。一般的には、第一節、第二節の歌詞は「あーりいから あーりおーる うふちいきぬゆー うきいなんやいまん ていらしょーり」、「ちいきぬかいしゃー とうかみーか みやらびかいしやー とうななちい」である。この歌謡のみるべきところは、幼児たちの、ままごとなどの遊びにおけるさまを詠ったものではあろうが、側面的に、物の乏しかった時代の生活を偲ばせる内容となっている。『日本民謡大観・八重山諸島篇』日本放送協会編。

参照。

五、伝統民俗芸能継承の系譜

これまで展開してきたごとく、古見村では多岐にわたる豊富な伝統民俗芸能が伝承保持されておりながら、見聞の限りではその発生にかかわる上古は杳として不明である。これらの芸能がどのような源泉をもち、如何なる過程を辿り、いまに至ったかについては、今後の検証を俟ちたいと思う。

よってこの項では現在判明している古見村の、明治期を上限とした芸風継承の系譜を記す。

伝承の方法として、〈祭祀儀礼歌謡〉、〈狂言・ゆんぐとう・棒技〉、〈節歌〉、〈舞踊〉などそれぞれの種類におけるレパートリーを、先輩格の伝統芸能保持者集団より、後輩に当る若者集団が、その芸風を継承する形態が確認された。

祭祀儀礼歌謡の継承

	大底満加 (1894-1938)	
	新本樽 (1906-1944)	
富里蒲戸 (1874-1939)	赤嶺賢三 (1895-1953)	
富里與利 (1877-1948)	富里富吉 (1905-1954)	次呂久弘起 (1921-1995)
次呂久善三 (1894-1938)	大底松 (1906-1952)	山本哲男 (1923-1995)
赤嶺與利 (1887-1918)	田場松太郎 (1911-1965)	山里寅吉 (1926・2・1)
山里加那 (1890-?)	宮古長祥 (1912-1947)	
	友利加那 (1903-1993)	
	新本津久利 (1913-1961)	

※伝承者のうち、現存の方々については（ ）内に生誕年月日を、物故者については（ ）内に生没年を記した。生没年の不明な場合は？で示した。以下同じである。

狂言・ゆんぐとう・古謡・棒技の継承

- | | | |
|----------------------|----------------------|----------------------|
| | | 新本良明
(1966・8・28) |
| | | 新盛昇
(1932・11・10) |
| | | 新盛宏
(1932・11・10) |
| | | 大底朝要
(1934・7・15) |
| | | 新本長義
(1936・9・21) |
| | | 新初藏
(1937・11・27) |
| | | 富里邦弘
(1940・4・8) |
| | | 新盛一雄
(1955・2・25) |
| | | 大底博
(1941 - 1997) |
| | | 前元修
(1952・4・30) |
| | | 新本長定
(1955・3・12) |
| | | 新盛敏克
(1963・10・15) |
| | | 新盛克典
(1971・6・17) |
| | | 内野篤
(1967・8・27) |
| | | 親盛一功
(1966・4・9) |
| | | 新敏
(1967・4・20) |
| | | 金城孝徳
(1946・6・30) |
| | | 山本正治
(1950・1・27) |
| | | 次呂久善一
(1948・12・2) |
| | | 新城長博
(1958・4・7) |
| | | 松本貢
(1943・1・9) |
| | 大底満加
(1894-1938) | 赤嶺泰夫
(1920-1988) |
| | 新本樽
(1906-1944) | 次呂久弘起
(1921-1995) |
| | 大底松
(1906-1952) | 山本哲男
(1923-1995) |
| | 田場松太郎
(1911-1965) | 與那花信次
(1928-1958) |
| | 新本津久利
(1913・5・24) | 山里寅吉
(1926・2・1) |
| | 宮古長祥
(1912-1947) | 前元良造
(1927・1・24) |
| | 富里倉三
(1913-1978) | |
| 次呂久善三
(1894-1938) | | |

節歌の継承

	大底満加 (1894-1938)	
富里蒲戸 (1874-1939)	新本樽 (1906-1944)	仲本芳雄 (1926・2・5)
友利伊佐 (1880-1926)	富里富吉 (1905-1954)	新本定男 (1937・9・7)
赤嶺與利 (1887-1918)	大底松 (1906-1952)	
	新本津久利 (1913・5・24)	

舞踊の継承

	大底ナヒマ (1898-1927)		内野ハツ (1938・9・9)	新克子 (1940・8・6)
	友利マアチ (1899-1960)		新盛チヨ (1940・12・13)	高嶺初枝 (1942・8・25)
	吉峰オナリ (1902-1988)		安里俱子 (1945・6・14)	新盛基代子 (1951・1・9)
	宮良ウナヒト (1897-1961)		大底ハマ子 (1942・4・11)	松本千枝子 (1945・3・20)
	友利伊佐 (1880-1926)		大底恵子 (1952・12・25)	松田京子 (1934・3・19)
	新本ウナレ (1905-1991)	田場光 (1916-1954)	仲嶺科子 (1954・1・27)	次呂久はるみ (1957・7・13)
	新本トヨ (1912・10・1)	新本トミ (1916・3・2)	小波本早苗 (1953・12・5)	高江洲美代子 (1948・1・21)
	石垣クヤ (1906-1957)	前盛キク (1922・10・21)	前元光代 (1954・1・27)	儀間史江 (1960・12・15)
	富里サカイ (1911・4・19)	吉峰セツ (1924・9・5)	金城昭子 (1952・8・5)	永露芳子 (1954・12・12)
	大底マアチ (1912・6・12)	仲本セツ (1928・4・20)	新三千代 (1962・7・18)	石原つや子 (1942・3・18)
			大浜るみ (1965・2・2)	石原忍 (1969・2・25)
			平良貴代子 (1968・10・12)	新盛香代子 (1961・9・15)
			新さとみ (1969・12・31)	喜納春美 (1967・7・26)
			大底朝枝 (1974・5・20)	磯部みちよ (1967・3・17)
			大底吟子 (1975・10・14)	新垣多津子 (1954・8・8)
			大底真紀 (1977・3・24)	
			親盛ヒロ子 (1921・12・7)	

六、むすび

〈はじめに〉で述べたように、沖縄県立芸術大学附属研究所と西表島古見地域共同の、古見村歴史民俗調査（1991－1995）が実施された。

よって前述の諸項は、その折調査に従い当たった古見村伝統芸能の記録であるが、同報告書を作成するについて、貴重な文献資料を引用、傍証として参照させてもらった。とりわけ大底朝要氏をはじめ、地域の人々には、個々の事象を取纏めるに際し適格なご助言ご協力をいただいた。感謝を捧げつつむすびとしたい。

参考文献

- 『日本民謡大観（沖縄・奄美）八重山諸島篇』 日本放送協会編 日本放送出版協会
- 『南島歌謡大成IV 八重山篇』 外間守善・宮良安彦編 角川書店
- 『八重山民謡誌』 喜舎場永珣著 沖縄タイムス社
- 『八重山の社会と文化』 宮良高弘編 木耳社
- 『竹富町古謡集』（第1集） 竹富町教育委員会
- 『沖縄芸術の科学・第7号』 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要
- 『中山傳信録』 徐 葆光著（原田禹雄訳注）言叢社
- 『あけぼの―八重山歌工工四編纂百周年記念誌―』『八重山歌工工四』編纂百周年記念事業期成会刊